

---

# やっぱり男の娘の話。 リリカルなのはオリ主

開店休業状態

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

やっぱり男の娘の話。リリカルなのはオリ主

### 【Nコード】

N9620R

### 【作者名】

開店休業状態

### 【あらすじ】

適当な主人公が適当にはやてのうちに下宿する話。

チート主人公だけど、戦闘なんていらへんかったんや……。

基本的にゆるい話です。ギャグ作品っぽい？

大分昔に書いたものなので設定がへんだったりしてます。

## プロローグ

気付いたら街中に突っ立ってた。おかしいな？昨日は確かに家に帰って寝たのに。

不思議に思っ、某少年探偵っぽく顎に手を当てようとすると、手紙を持っていることに気付く。

ひとまず、ベンチに移動して綺麗な封筒を開いて、内容を確認する。

新春とは申しながらまだ堪えがたい寒さが続きますが、如何に御過ごしでしょうか。

唐突な事で驚かれるとは思いますが、貴方は前世に置いて御隠れ（逝去の意）になりました。

こちら側の不手際によって貴方をそのような事態に陥らせてしまい、遺憾の意を示す事でしよう。

本来、貴方の死は寿命によって訪れるものでしたが、職員の不手際で、貴方を心臓発作にさせてしまいました。

その為、貴方には様々な得点をお付けして、他の世界へと転生をさせていただきました。また、その際にその世界に置いての主人公と同年齢にさせていただきました。

転生は仏教の概念ですので、他世界の魔法などの技術を植えつけるのは不可能でしたが、とある漫画作品において日本にありながら、強力な力を持つ能力をおつけしました。

その能力も完璧に制御出来、また、その世界における魔法などの技術の習得余地もあります。

また、貴方の容姿も貴方が思い描く容姿にさせていただきましたので、ご勘弁の程をお願い致します。

かしこ

何だこの手紙は。文面がやけに几帳面だとか、手紙を書いた人間が女だとかは関係ない。

まずは、俺が死んだと言う事。これはぶっちゃけどうでもいい。親も居ない、兄弟も居ない、嫁も居ない、彼女も居ない。ナイナイ尽くしの人生に悔いはない。

次に、不手際で死んだ事。まあ、他の世界になんかの能力つきで飛ばしてくれただから許す。

けどなあ、この外見だよ。俺が思い描いた容姿に変えたっていうけど、これはないだろ？

足元の水溜りに映る、銀髪オツドアイの俺。しかも長い、腰まである。なんという厨二病。まあ、髪は染めて、コンタクトをつけるとしようか。

次に能力なんだけど。全然分らないよ。せめて、能力の説明くらいはして欲しいね。

なーんて思っていると、いきなり手元に現れる手紙。再び開く。

説明不足で申し訳ありません。貴方の能力ですが、日本に置いての技術、魔法などの異郷文化ではない事を限定し、

最大限の譲歩として、最終兵器彼女という漫画作品の能力を付加させて頂いております。

考えればその武装が作成されますので、御活用下さい。

能力が微妙すぎた。転生チートオリ主の能力としては始めて見るよというか、今更ながらこの世界って何処？周囲を見る限りだと、どう見ても日本人だらけなんだけど。

一先ず、指先がライターになるように念じる。延びて、穴が開く指先。別に痛くはない。

火をつけて、手紙を燃やす。こんな変な手紙見られたら、恥ずかしくて死んじゃう。

「どうしよっかな……」

高くなった声で呟き、ベンチに寝転がる。さっきの時候の挨拶を見る限りだと、一月らしいのだが、そんなに寒くない。むしろ暖かい。疲れていたのか、俺は何時しか眠っていた。

揺れている。地震でござる。そんな下らない事を考えながら、俺は飛び起きた。

「おいてけ！ かまうな！ しかたない！」

「うひゃ！？」

「なんだ知らんのか。避難訓練のおかしといえば、おいてけ、かまうな、しかたないだろう」

「違うと思うんやけど……おさない、かけない、しなないちゃうん？」

「最後が物騒すぎる件」

飛び上がった勢いで、俺を揺すっていたらしき栗色の髪の子と漫才を続ける。

辺りは少し日が落ちている、どうやら不審者を起こしていたらしい。俺の事だけだな！

「俺としては、おしのけ、かまわん、しにさらせ。だと思っただがな」

「最初と言つとるのがちゃうやん。んで、なんでこないな所で寝とるん？」

「ここが今日から俺のスイートハウス。スイートハニーが居なくて少し残念」

「ゴミの甘酸っぱい匂いがするからスイートハウスかいな。正直ゴミンやな」

俺もそう思う。というか、ゴミ処理場が近いのに公園なんか作ってるんじゃないよ。

まあ、この街には初めてきたわけなんです。そういえば、この女の子日本語喋ってる。

それともあれか、転生SSのお約束で、貴方も自国語を喋ってるって奴か。

「そんで、ほんまは何でこないな所で寝とったん？」

「俺、家無き子レミちゃんだからさ。ほら、このフルメタルジャケット弾を手がかりに親を探してるんだ」

手に入れた能力をくだらないことばかりに使っていると自覚しながら、手の平にジャケット弾を作り出す。

「見つかる可能性皆無に等しい気がするんやけど」

「というか、確実に見つからないね。撃った事があれば線条痕で分かったかも知れないんだけど」

軍オタ程ではないが、そういった知識は豊富だ。主に長いオタク人生で培った知識だけだ。

「んで、本当は？ 仏の顔も三度までやよ？」

「天涯孤独な厨二病主人公なんだ。いや、これマジね。ほら、見た目的にもオリ主っぽいじゃん？」

「まあ……その銀髪に紅と蒼のオッドアイはオリ主っぽいなあ。コンタクトちゃうん？」

「紅と蒼っていう辺り、厨二病についての理解があるね。カラコンじゃないよ。これはそのまんま。正直な話、恥ずかしくて死ねる」

「強く生きるんや……！」

グツと、見事なサムズアップをかます女の子。笑顔がまぶしくて焼ける。

「ところで、天涯孤独っちゅうのはホンマなん？」

「うんうん。両親は大分昔に死んだし、兄弟も居ないし親戚も居ない。かといって孤児院には行きたくないでござる」

そもそも戸籍がないのだから行きようもない。というか、最初に警察のお世話になってしまう。

そこら辺の融通が利かない神様だから困る。かしこという終わりだから、ドジッ子だと予測して萌えておく。

「せやったら、うちに来る？」

「いやいや、迷惑だし」

「気にせんでええよ。うちも両親おらへんのや。一人は寂しいしなあ」

「ならば私に任せてくれたまえ、今夜は寝かせないよ」

「サムス」

「俺、ドンキー使う」

唐突にスマブラ？の対戦が決定されたので、申し訳ないながらも邪魔させてもらった。



## 第一話（前書き）

ゆるい話です。暇潰しにとつづ。

## 第一話

「うーん……いい家ですねえ。中々新しく見えますが、そのところ、どーなんでしょう？」

「たしか、私が生まれた頃に建てたらしいで」

「なるほど……築三十年か、随分綺麗に手入れしてるんだな」

「ご飯食べさせへんで」

「すみません。築十年って所か？」

「せやで、今年で九歳や」

今考えると、今の俺の姿と同じくらいの年齢に見える。と言う事は、この子が主人公か？

いや、日本の人口の数%はこの子と同じくらいの年齢なわけだし、早合点かも知れないな。

「で、君は主人公？」

「人生と言う名の物語は、一人一人が主人公なんやで……」

「何カッコイイ事言って誤魔化してんだよ」

「なんや、崖から落ちかかつてるところ引つ張りあげて、これはお前の物語だ！って言えばいいんか？」

「アーロン乙。お前どう見たって女だろ。どっちかつつとリュックだな」

「そういうあんたは、ヴァンみたいやな」

「勝手についてくる観光客と一緒にすんな」

「というか、今までナチュラルに会話してたけど、この世界にもFFあるんかい。」

「バリアフリーな入り口で、女の子を抱き抱えてやる。軽いなあ。というか、腕力が異常にあるなあ。」

「今更やけど、自己紹介がまだやったな」

「ん。そういえばそうか」

「八神はやてや。あんたは？」

「神崎刹那」

「……………本名か？」

「恥ずかしいだろ……………？でも本当なんだぜ……………」

「うん、本当に本名なんだ。恥ずかしくて死ねるよ。」

「前世はあれだ、黒髪黒目でまだよかった。けどさ、この容姿でこの名前はないよな……………」

「どんな厨二キャラだよって……………後で強盗でもなんでもして髪染め買っぞ。」

「しかしまあ……リリカルな魔王様の世界か」

実際の所、俺は第一期しか見てない。あとはwikiである程度の事を知ってるだけなのだ。

まあ、今の時期が春だから、PT事件も闇の書の事件も起こっていないだろう。

そんな事を考えながら、はやての誘導で居間まで連れて行き、ソファーに座らせてやる。

「重くなかった？」

「軽かった」

試しに片手でテーブルを持ち上げる。テーブルは揺らぐ事なく水平に保たれたまま持ち上げられる。

つまり所、俺は両手を使って頭の上に物を保持すれば、少なくとも1t以上の物を持ち上げられるのだ。

「あれやな、孫悟空みたいやな」

「かめはめ波は撃てないよ」

レーザー砲台を作るくらいは出来るけど。

「さて、いきなりここまで連れて来られたけど、俺はどうすればいいのかな？」

「住み込みでホームヘルパー？」

「待遇は？」

「そやなー。三食は出したるで？」

「オッケー。ひきつけよう」

見ず知らずの俺に随分と無用心だとは思ったが、渡りに船と言う事で引き受けた。

しかし、はやてははやてでなにやら驚いている様子。

「引き受けるんやな」

「行くところないしなあ」

「なんや。本当だったんかいな」

「嘘ついてもしかあないしなあ。さて、晩飯を作ってやろう。凝ったものは作れないけど、それなりに食べれる物を作るとするよ」

「あ、わたしも手伝うで。お客さんに全部させるのは申し訳ないし」

「ホームヘルパーじゃなかったのか？」

「それは明日からや」

こんな風に言い合いながら、俺とはやては夕飯を作った。

## 第二話

夕飯を食べ終え、入浴の時間と相成った。

「はやて……！これは拙いぞ！」

「何が？」

「いい年した女の子が男の子と一緒に風呂に入ろうなんて……私は貴方をそんな風に育てた覚えはありませんよっ！」

「別に気にせんでええと思うんやけどなあ……」

「駄目だっ！俺が暴走して襲い掛かる可能性もなきしにもあらずという可能性がないでもないという可能性がないでもない！」

「何が言いたいんかさっぱりわからんわ！もっとハッキリいわんかい！」

「俺はロリコンなので、はやての裸に欲情する可能性があるんだよ」

「なるほど……危険な人なんやな」

「ああ、危険な人なんだ。というわけで、水着を着て入ろう」

「あ、それやったらいいんや。うちの部屋のクローゼットの中に、ランドセルがあるから、その横の緑色の箱に入っとるで」

言われたとおりにとりに言ったのだが、水着は一年生の頃のもの。

着れるのだろうか？

気にしても仕方が無いので、一先ず水着を渡して、脱衣所の外で待つ。その間に、能力を使って水着を作る。

俺の体はナノマシンによって構成されており、このナノマシンを精製する事によって武装の精製が可能となっている。

なお、ナノマシンの増殖に関しては、この世界の魔法技術に使われている器官。リンカーコアから生成される魔力と同じものを使用している。

なんだか、あの手紙に書いてあったことが矛盾しているが、魔法が使えないかもしれないので、案外間違っていないのかも知れない。ひとまず、俺も水着に着替えて、はやてを風呂に入れてやる。水着は少しキツかったが、着れたそうだ。リンカーコアの干渉の所為で、成長不全なのかも知れない。

「あつ、いい湯だな〜バババン」

「古っ」

「悪いか！？」

古い＝年寄り。この図式は確実なので、泣きそうになる。

「というか、せつちゃん髪長いから女の子みたいやで」

「このちゃんも髪伸ばしたら？あと、次女の子みたいって言うたら、本気で襲っぞ」

「このちゃんって誰やねん」

「せつちゃん＝このちゃんの図式が成り立つんだよ」

「君が何を言っているのか、よう分からへんよ……セツナ……」

「好きって事さ、欲情に値するよ……」

「盛りのついたケモノやないんやから、欲情欲情ってさつきから五月蠅いで」

「サーセン。つか、最近の小学生進んでるね。俺の言った言葉の意味しっかり分かってるし」

「いや、私は基本的に家におるからなあ……大抵パソコン弄っとるし」

「なるほど。だからってそんなヤバイサイト見てるんじゃないよ」

「フヒヒwwwサーセンwww」

「はやてがやると、妙に可愛く思えるから不思議っ!」

「褒めても何もでえへんで」

「いや、俺の興奮によってアドレナリンが放出される」

「下半身に血液は集中させないで下さい」

「これが噂の逆セクハラ!？」

「噂になつとるの!？」



こんな感じで、楽しく風呂に入りました。ちなみに、体は精神に引っ張られるのか、興奮もクソもなかった。なので、明日から普通に風呂に入る事になりそうだ。

そして、今は居間で風呂上りの御茶を飲んでいる。いやあ、久しぶりに御茶を飲んだよ。基本的にコーヒーしか飲んでなかったし。

「はやてちゃん。知らないおじさんに引き取られるのと、孤児院に行くの。どっちがいい？」

「知らないおじさんやな」

「そうか……そうだ、はやてちゃん。僕はね、魔法使いなのだ」

「おじさんが病院行った方がいいんじゃない？」

「ひでえ……つか、このネタ知ってるのね」

「家に居ると暇やし、後見人の叔父さんが毎月かなりの額振り込んで来てなあ……預金したら利子だけで豪遊生活出来るで」

「一体幾らあるんだよ。十億円預けても八千万くらいしか利子つかないんだぞ。」

「しかしまあ、それだけの額があるのだから、ゲームを買ったりしても問題ないだろう。」

部屋に置かれている大量のゲーム機。ソフトもかなりの量がある。ついでに、さつき水着を取りに行ったときにエロゲのパッケージがクローゼットに放り込んであった。

「どう考えても小学生の生活じゃない件」

「汚れちまった悲しみに……」

「自分で汚れといて、悲しみもクソもあるか」

「それもそうやな。んで、何が言いたいんや？」

「だから、本当に魔法使いなんだって」

「だったら証拠見せるんや。そこの窓ぶち破って修復するくらいでええで」

やらねえよ。しかし、F a t eを知っているのなら、ネタに答えねばなるまい。

「  
投影開始」

基本骨子もクソもなく、手の平に夫婦剣モドキの双剣を作り出す。

「おお！？ホンマに魔術師やったんか？」

「フハハハ、凄いだろう」

「役に立たないから別に」

「酷っ！？もつと驚こつよ!？」

「士郎はどうでもええから、アーチャーかセイバー出さんかい」

「なん……だと……」

しかし、ネタに答えてこそ芸人なのだ。別に芸人になった覚えは無いが、ネタに答えなければ名が廃る。廃る程の名もないのだが。一度部屋から出て、全身のナノマシンの構成を変更する。ナノマシンを急速に増加。体積を増幅し、髪の毛を金髪に、目も翠に。体つきも少女といった風に変えて、騎士甲冑を身に纏う。エクスカリバーモドキの西洋剣も作っておく。

### 第三話

「……なんで俺はこんな事に能力を使っているんだろう……」

ふと悲しくなったが、気にせずに部屋に戻る。

「サーヴァントセイバー。召喚に応じ参上した。問おう、貴方が私のマスターか？」

「令呪を持って命ずる！今すぐ服を脱ぐんや！」

「ふざけるな！」

俺のグーが、はやてに炸裂する。

「いったー……ノリが悪いなあ……」

「ノリもクソもあるかよ。いきなりセクハラかます奴があるか」

「ほいで、どうやってその格好になったんや？それも魔法かいな？」

「んむ。そういうもんだ」

ちなみに、この姿はあくまで仮の姿。形状記憶合金のように、ナノマシンの制御を手放すと元の姿に戻る。

「はー。凄いなー。私にも使えへんか？」

「使えるよ」

「なんやて!？」

「魔法を使うには、俗に言う魔法使いの杖がいるけど、はやての部屋にあった鎖巻きの本が魔法使いの杖だったから、アレの封印をちよちよいと解けば何とかなる」

「ほうほう」

「まあ、あれ壊れてるから修理しないといけないんだけどね」

「なんやて!？」

「ひとまず、修理してみるから貸して」

「おkや。早く直すんや」

言われたとおり闇の書を取りにいき、手の平に無数のコネクタを作り出す。

そして、接続。防衛プログラムが起動してこつちを攻撃してきたが、全身のナノマシンの処理装置を使ったブルートフォースアタックで無理やり突破。

その後、守護騎士プログラムを起動させずに破損したプログラムを改変していく。元来の夜天の書のプログラムが残っている所から、少しずつ修復していく。

本来、夜天の書というのは魔法のデータベースという物に近い。魔法を蒐集し、それを行使。また、魔法を蒐集するための存在に守護騎士プログラムがある。

そして、破損した際には自動で修復する機能。だが、人間とは欲深い生き物。この自動修復機能を最大限まで強化。無限転生機能へと

変化した。

また、無限転生機能とリンクする事によって所持者の無限の命を保障する。こんな改変を施したのは大馬鹿だ。

40%程度しか残っていなかった夜天の書の機能から徐々に復元し、89%程度まで復元完了。これ以上の復元は起動しなければ無理だ。防衛プログラムを起動し、それを物理的手段で強制排除。その後管理者権限で自動修復開始。そうすれば、修復された箇所から自動でプログラムを組み上げ、

元来の夜天の書とほぼ同機能の結果を得られるだろう。恐らく、管制人格の削除もしなくていいはずだ。まあ、所有者との同期が出来なくなるから、ユニゾンが出来ない可能性があるけど。

そこら辺は原作と同じく、リインフォースツヴァイだっけ？あれを作る事によってユニゾンが可能になるだろう。

出来る限りの修復が完了した闇の書を持って、はやての元へと戻る。

「俺の出来る限りは修理した。後は、はやてが管理者権限で守護騎士プログラムを起動して、そこから防衛プログラムの修復をしないといかん」

「やり方がさっぱりわからへんのやけど」

「……守護騎士プログラム機動開始」

横からの強引な割り込みで、守護騎士プログラムを起動する。守護騎士プログラムは自動で起動するものなので、俺が起動しても問題は無い。

途端に光り出す闇の書。俺が魔道書を改変した影響が出ている可能性も否めないのも、はやての周囲に電磁結界を張る。

俺のナノマシンを収束して、電磁波による反発力を使用した防御フィールド。計算上では、戦車砲くらいなら耐える事が可能だ。

とはいっても、物理的な攻撃のみに有効なので、衝撃波には効果が無い。まあ、一応の保険なので。

「Ich befreie eine Versiegelung  
(封印を解除します)」

「なんやて！？何を言っとるか分からん！でも意味はわかる！不思議っ！」

「翻訳魔法だ！」

素敵な具合にテンパって、俺とはやてはわたたと暴れ出す。

俺は戦闘モード（笑）に移行しており、厨二な感じのするバイザーに左腕のガトリング、右腕には高周波ブレード。

背中には天使の羽の様な飛行ユニットが形成されており、素敵な具合に厨二病。

「夜天の書の起動を確認しました」

喋り出したのは、赤というかピンクのポニーテール。確かシグナム

「我等、夜天の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にございます」

で、金髪の……シャマルだっけ？そいつが夜天の書を抱えている。

「夜天の主の下に集いし雲」

筋骨隆々な犬耳漢。全く萌えないザフィーラ。

「ヴォルケンリッター。何なりとご命令を」

最後の赤髪ロリ。こいつの名前だけはしっかり覚えてる。ヴィータだ。

「やった！成功だ！」

「ホンマや！本から人間が生まれたで！」

イヤッホウと二人で飛び上がり、飛行ユニットが噴射跳躍。天井に頭を突っ込み、まるで死体のようにぶら下る。

「せ、刹那ああああ！！！」

気づいた事がある。俺の飛行ユニット。上と左右にしか移動出来ないんだ……。

「な、何事ですか！？」

俺の胴体下部にあるカメラから、狼狽しているシグナムが見える。そりゃそうだろう。現界直後に見えたのは、主と天井からぶら下る俺の姿。

「はやて、天井壊していい？」

「修理するんならええよ」

と言う事なので、右腕のブレードで頭の周りの建材を切り取って下におりた。

バーニアでゆっくりと下降して、頭の周りの建材も外す。素敵な首輪ね、じゃねえよ！



「何者だ！」

途端に向けられる敵意。こわいよう。

「私かね？私は絶妙に怪しい者だ」

「そして私は横浜基地副指令や！」

ノリがいいなはやて！

「だから、何者だと聞いている！」

「ふむ……何者かと言われれば、絶妙に怪しいものとしか言いようが無い。何者かといえば、ルネ・デカルトの提唱した。コギト・エルゴ・スムという有名な命題が……」

「そんな事は聞いていない！」

「聞いていないといえば、耳にある耳骨だが、これは非常に脆い骨でね、偽造されたミイラの判別の指針になるのだよ。まあ、超音波破砕機を使えば簡単に砕けるのだがね」

「真面目に答えんか！」

「真面目といえば、真面目に不真面目という矛盾しているようでいて正しい言葉があつてだね。これはアニメのセリフだが、中々に深いセリフだと思うよ」

「貴様！」

「貴様といえば、今は目下の人間や挑発に使われるが、日本古来においては目上の人間に使う言葉だったのだよ。貴人に様。貴様という言葉が目上の人間に使われるのもおかしくはない」

「何が言いたいのだお前は!？」

「何かといえば、私の蘊蓄を語っているのだよ。そうそう、これを上げよう」

ナノマシンでトーテムポールのような物を作り、シグナムに渡す。畏かと思つて警戒しているようだ。

「ムー大陸の神だそうだ。お土産だよ。そうそう、捨てる呪われるよ、気をつける」

「な、なんだと!？」

驚いて魔法で検査を開始するシグナム。シャマルに頼んだ方がいいんじゃないか？

「くつくくく……なんでそんなに上手いんや……」

「ていうか、なんでマブラヴオルタなんて知ってるんだよ」

「ネットで進められたんや」

「そつか。んで、俺が誰かって言うと、はやてに雇われたホームヘルパー。はやてのリンカーコア異常の治療をしてたんだよ」

はやて。というのが主だと理解しているのだが、俺がリンカーコア異常を引き起こしている黒幕ではないかと疑われているらしい。

「夜天の書の転生機能で、はやてが主に選ばれたんだが、選ばれた当時、はやてはまだ赤ん坊だったみたいでな。

夜天の書がリンカーコアから魔力の供給をしていたんだが、未成熟なリンカーコアだったもんで、肉体に影響が出たらしい。

その所為で、はやては足が麻痺してたんだそうだ。俺が夜天の書を修復したから、直ると思うけど」

その言葉に途端に顔色が悪くなるヴォルケンリッターの皆さん。そりゃそうだ、主を守護するヴォルケンリッターの所為で、主に危害が加わっていたんだから。

「まあまあ、気にせんでええよ。どうせ治るんやし。グラデーシオンエアとか使えるんならええし」

「残念ながら、グラデーシオンエアは士郎専用の魔術です」

「絶望した！投影が使えない世の中に絶望した！」

「大丈夫だ！固有結界ならいける！えっと、そのハニーブロードの人！封時結界展開頼む！」

「主の命令以外は聞けない」

冷たいっ！？

「そこのお天気お姉さん！その封時結界とやらを張るんや！」

言葉と同時に張られる結果。俺は急いで回りに剣を作り出して突き刺す。

「これがアンリミテッドブレイドワークスだ！」

「武器の貯蔵は十分か？」

「十分ですサー！」

うはははーと笑いながらガトリングを乱射。壁がボロクズのように崩れ去る。

「……主。この者の説明を」

「ん？私が雇ったホームヘルパーさんやな。私にも魔法が使えるって教えてくれたし、悪い人じゃないよ」

「そうでしたか……」

「フハハハハ！パーティーによっこそおお！！！！」

背中のミサイルポッドから大量のミサイルを発射する。

その姿はどうみても魔王という形容詞が似合いすぎていた。

「……悪い人じゃないはずや」

「そうですか」

その後。原作道理の展開と相成り、野暮ったい騎士甲冑を脱がせられて、普通の服を着せられていた。

## 第四話

「ザッフィーの毛皮って常識的にありえないから、外に出れないんじゃないか？」

「ふむ……青とはおかしいのか？」

「まあ、青っていうよりは、藍色っぽいな。一応、こういう色の狼もいたらしいけど、ここまで青くはなかったぞ。」

蒼い狼白き雌鹿って奴だけど、灰色っぽい青だったから、外に出るときは白か黒に変身魔法で変えた方がいいな」

「了解した」

ザッフィーとは結構仲良くやってる。男同士だし。

とはいっても、書から出てきた二日だから、本当に仲良くなれてるかはよく分からない。

他の守護騎士達も、家族、という物がよく分からないで四苦八苦しっている所だ。

ザッフィーは犬役なので、特に難しいというわけでもないようだが。

「今日はデパートで騎士甲冑決めるんだっけ？」

「ん、そうやで。ザフィーラにも人間形態で来て貰うで」

「その前に、今日は病院だったから検診にいくぞ。皆には自分のリンカーコアだけで維持してもらってるから、はやてのリンカーコアには負担が無いはずだから、

足の麻痺も少しは治ってるはず」

「そうなん?」

「そうなんだよ」

「そういえば、そろそろ新学期なんだよな。いやはや、ここまで時期がズレてるとは」

即ち、PT事件への介入も可能というわけだ。まあ、そんな事はどうでもいい。  
庭で素振りをしているシグナムさんのところに、とある漫画を持っていく。

「シグナムさんシグナムさん」

「なんだ」

「これ、やってみて」

「?」

取り出したるは、るろくに剣心。飛天御剣流もとい、ヒテンミッルギスタイルが使えないかと思っただのだ。

「……出来るか?」

「無理だ」

「ですよー」

一瞬のうちに9回突きを繰り出すって馬鹿いつてんじゃないよ。

「俺が手本を見せてやろう」

右腕をブレードにするのではなく、右腕にブレードを作り出す。刺突剣だが、幅広の刀身に大きな目の鏢には噴射ユニットがつけられている。

また、切っ先にも反転用の噴射ユニットがつけられており、正真正銘俺専用の剣だ。

「はあああっ！飛天御剣流九頭竜閃！」

鏢の噴射ユニットで突きを繰り出し、切っ先の噴射ユニットで無理やり戻す。

その成果により、一瞬のうちに9回もの突きを繰り出すっ！

「難点はこれを使うと死人が出る事だ！」

「使えん。木っ端微塵になつては蒐集も出来ん」

「ですよー……ならば天翔龍閃！」

抜刀と同時に左足を前に出す！これによって神速の抜刀術となる！俺の左足の肉が吹き飛び、勢いよく血のようなオイルが吹き出す。

「し、失敗したあああ！！！！」

「シャマル。この馬鹿を治療してやれ」

「なに、それには及ばんよ」

吹き飛んだ肉を拾い上げ、結合を元に戻せば、簡単に怪我は治る。

「便利な体だ」

「まあね。武器も使いたい放題だし」

シグナムには全身武器庫という称号を貰い、はやてには一人軍隊という称号を貰った。

ヴィータにはバグキャラ。シャルムには治療いらず。ザフィーラには最終兵器。ザッフィーが一番的を射ているな。

次はシャルムのところにいく。シャルムはサポート係なので、大抵はやてに治療魔法をかけているか、カートリッジを作っている。

「シャルムさんシャルムさん」

「なんですか？」

うおう。瞳が冷たいよ。まあ、原作でも出た直後は感情が殆どなかったって言うし。

でも、シャルムが一番感情がありそうなんだよな。一番表情が変わりやすい人。

「俺にもカートリッジ作らして」

「そうですね。その弾薬に魔力を込めて下さい。満杯になったら圧縮をかけて」

「了解」



いわれたとおりに、限界まで圧縮しまくった魔力を注ぎ込み続けた。

「使えません」

「なんで!？」

「こんなのを使ったらデバイスが破損します。これの四分の一で結構です」

「そうですか」

泣く泣く俺が作った12個のカートリッジは廃棄となった。記念なので一応持っておいたが。

その後、シャマルに言われたとおりの密度でカートリッジを作った。俺が五个作る間にシャマルが二つしか作れないのは魔力量のお陰だと思っただ。

だって、前にシャマルに俺の魔力量がどれくらいかって聞いたら、無意識に放出してるだけの魔力でも魔力炉並みの出力らしいんだ。化け物だろ。

しかも、無意識って言うのはつまり、余剰魔力。全力で魔力を解放したらどうなるのか怖い。

さて、次はヴィータと遊ぼう。ヴィータは基本的に何をするでもなく、テレビを見ている事が多い。

多分だけど、一番最初に感情が出てくるのはヴィータだと思う。だって、やる事が無いから俺がいつつアニメ見せてるし。

「ヴィータ。アイス食うか？」

「食う」

「チョコとバナラどっちがいい？」

「バナラ」

「俺の膝の上で食べるのと、ソファアの上で食べるのどっちがいい？」

「ソファア」

「ちつ。ほらよ」

バナラのカップアイスを手渡し、ヴィータの隣に座る。いっておう、俺はロリコンであると。

いや、今の身体年齢だと特に変わらないように見えるが、ヴィータは永遠の幼女なので、いつかはロリコンになる。

「なんや、刹那。随分と吹っ切れた顔しとるで？」

「ああ、答えは得た。大丈夫だよ、遠坂。俺も、これから頑張っていくから……」

「確かに声似てるかもしれんけど、宝石魔術は使えんで」

「そうですか」

何とはなしに、アーチャーの姿になってみる。ヴィータが変な顔でこっちを見てきた。

「お前、そいつの事知ってるのか？」

「は？」

「昔の主が次元震を起こそうとしたときに、お前と同じ格好をした奴が襲ってきた。あたし達を一人で倒して、主を殺したらしい」

「は、はやて！抑止の守護者は本当に居たんだ！」

「な、なんやってー！？」

「まあ、冗談はさておき。前に調べたけど冬木市はないんだよね。でも、次元世界にこのことと同じような世界があるかもしれないし」

「むむ。興味は尽きへんなあ」

「そうだなあ。もしかしたら投影魔術とか見れるかもしれないし」

こんな下らない話をして一日は終わる。

## 第五話

一週間後。そこには見事に感情を持った守護騎士の皆が！

「ヴィータアアア！！！」

「うるせえ！」

ヴィータのグーが、刹那に炸裂する。

「ぐふっ！効いたぜ……今のパンチ……」

「何をいつてんだ？」

「まあ、兎に角行こう。期間限定のアイスが発売するから、これでヴィータを餌付けしようと思ってだな」

「餌付けって言うのが気に食わねえけど……行く」

「よし、行こうか。金なら幾らでもあるんだぜ。主に日本銀行にクッキングしたお陰で」

「そうかよ」

こんな感じで、俺はいつもヴィータを餌付けしている。ヴィータ可愛いわヴィータ。

「期間限定のアレ下さい」

「はい。妹さんですか？」

「いいえ！未来の嫁です！」

「お前は何言っつてんだ刹那ああ！」

ヴィータのグーが、刹那に炸裂する。

「おうふっ！もつとおっ！」

「気持ちわりい！？」

兎に角、期間限定のアイスを買って、ヴィータと一緒に食べる。

美味そうにアイスを食べる姿は萌える。これだけでご飯三杯はいける。

「ヴィータ。俺のも食うか？」

「食う」

一口も手をつけていなかったの、即座にヴィータが反応する。

「はあはあ……」

「……なんで息粗くしてんだ？」

「ヴィータが可愛すぎて興奮してるんだ。俺の熱きリビドーが熱い吐息になって漏れ出してるんだよ」

「……アイゼン」

「こらこらこら！なにやってんだおまえ！？」

アイゼンが起動する前に、待機状態のアイゼンをヴィータから奪い取る。

「気持ちわりいんだよ！？大体おまえ！いつても可愛い可愛いって！」

「いいや！ヴィータが可愛いのは事実だ！俺の心が叫んでいる！熱くなれ！夢見た明日を必ず何時か捕まえるって！言っておくが！誰にも抑えられんぞ！俺の胸のざわめきは！」

「恥ずかしい事を大声で叫ぶなあああ！」

ヴィータのグーが、刹那に炸裂する。

「ぐふっ……はは、テレ屋さんだなあ……普通の人間なら死んでるから、もうちょっと手加減してくれるかな？」

ヴィータは肉体強化の魔法を全開で俺に拳を放ってくる。普通の人間なら死んでるぞ。

「だったら可愛いっていうな！」

「いいや！それは無理だ！俺には嘘を言う事は出来ん！」

こんな感じで、俺は毎日のようにヴィータにアプローチをかけている。

いやあー、現実のヴィータは最高に可愛いです。

## 第六話

ある日、俺はふと思った。

「俺はホームヘルパーとして働いている。はやてと食事を作っているし、買い物にも行っている、そして掃除や洗濯の家事全般も請け負ってる」

「唐突に何がしたい？」

反応したのは新聞を読んでいたシグナム。

「お前等、何してんだ？」

「……私は日々鍛錬をして、不測の事態に備えている」

「不測の事態は予測できないから不測だけど、それは何時来るんだ？永遠にこないんじゃないか？」

「……家の守りにについている」

「何から？新聞の勧誘なら俺が断ってる」

「私は……お料理の手伝いとか」

「シヤマルの作った料理は基本的に全て廃棄されてる」

「あたしは……あたしは……」

「何もしてないな」

つまり所、俺以外全員ニートだ。

「ニート侍とか犬つころとか廃棄物製造機とかゲートボーラーとか呼ばれたくなかったら、最低限家に食費くらいは納めようぜ」

その言葉に、全員が沈黙する。

「くっ！刹那！仕事を紹介してくれ！」

「よし、こんな事もあるうかと、昨日のうちに一晩でめぼしはつけている」

「お前ジェバンニかよ！？」

ヴィータが叫ぶが無視した。

「シャマルに教えてもらった転移魔法で、魔法生物が居て、特有の魔法体系がありながらも、管理局未確認の次元世界がある。

その世界での文明レベルは、この97管理外世界の中世レベル。その為、魔法生物の襲撃などに怯えている人間が居る。

また、そう言った生物を倒す事により、宝石などの金品として報酬が手に入る。これをこの世界で換金すればいい。

猿でも分かるように説明すると、ドラクエ世界で魔物を倒して金を貰おうっていう事だ」

「随分と手際がいいな……」

「まあ、こうなるのは予測してたわけだし。それに、シャマルはま



だしも、シグナムにヴィータは明らかに接客業なんかに向いていない。その上戸籍も無い。

ザッフィーはドカタのあんちゃんになれそうだけど、どう見ても日本人じゃないから向いてない。というわけで、この仕事を用意してた」

「なるほど。感謝する。早速行くでしょう」

というわけで、全員そろってドラクエ世界に転移した。

ちなみに、この次元世界滅茶苦茶遠い。通常転送を繰り返したら少なくとも五十年は掛かる。俺の馬鹿魔力だからこそ出来る転送だ。

「まずは俺がいつてくる。既にコネクションは取り付けてあるんだ」

「む。そうか」

というわけで、交渉用の姿に変身して仕事を貰った。仕事の内容は簡単。森に出る魔物の討伐。

とはいっても、全ての魔物を殺してしまっただけは生物体系のバランスが崩れる。彼等が討伐を依頼した魔物は、最近ここらに出没し始めたオークとでもいうような魔法生物。

身長は二メートル程度、豚のような顔をしており、体は肥満体系のようで、分厚い脂肪の鎧と、頑健な筋肉に覆われた手ごわい魔法生物。

とはいっても、魔法の使える人間にとっては大したことのない相手。だが、この世界の魔法使いは数が少ない。

その為、傭兵などに仕事を依頼していたのだが、全員帰ってこないという事だ。

「よし、仕事の依頼のとり方は分かったな？大抵は何処の町にもこ

ういったギルドがある。その窓口で仕事を貰えばいい。

報酬は宝石なんかの貴金属がいいけど、この世界の貨幣でもいい。後で宝石類に変えてもらえばいいからな。

まあ、この仕事が最初なわけだから、まずは全員で取り掛かるとしよう」

「分かった」

「へっ。オークだか何だかよくわからねえけど、アイゼンの頑固な汚れにしてやる」

というわけで、早速行動開始。指定された森まで向かい、オークとやらが住んでいる洞窟まで移動。

「ここに肉を放置しておびき出す。あいつらは肉が好物なんだそう  
な」

シグナムの魔力変換資質によって発生した火の上に、木に吊り下げた肉をぶら下げておく。

こうしておけば、焼けた肉の匂いに吊られてオークたちが出てくると思うんだ。

「俺はこの奴等を始末するから、皆は森にオークが居るかどうか探して始末してくれ」

「分かった」

「おう」

背中に飛行ユニットを形成。上空約四十メートル程度で待機し、両

手を電位差のあるレールに変化。

それを覆うように絶縁体の筒を作り出し、中心に金属製の砲弾を形成。発射直前まで電荷をかける。

ほんの少し、電荷を上げれば、即座に弾丸が発射される。俗に言うレールガンだ。俺としては電磁投射砲という呼び方が好きだ。

ちなみに、とある魔術に出てくるレールガンの人だが、空中に磁場を形成して弾丸を発射しているので、厳密に言うとレールガンではないと思う。

まあ、磁場による相互作用で発射しているので、レールガンではあると思うのだが、どちらかというとコイルガンに近いんじゃないだろうか？

また、音速の三倍らしいのだが、これはレールガンとしては遅い。何しろ50年近く前にレールガンは5.9 km/sの記録を叩き出しているのだから。

ちなみに、音速の三倍とは単純計算で1 km/sだ。まあ、磁力線の長さが分からないのだから、順当な速度なのか不順等な速度かは分からない。

「と、出てきたか」

下らない事を考えて居たが、いつの間にかオークたちが集まっていた。

洞窟からは出てこないが、周囲の森からオークが数匹出てくる。情報によると二十体程度らしいのだが、集まってきたのは十体。

まあ、俺達にとっては何匹出てこようとも関係ない。電磁投射ほうに電荷を更につけ、弾丸を連続して発射する。

五発の弾丸が屈強なオークの肉体をいとも容易く引き千切り、七体のオークが木っ端微塵となる。

また、残ったオークも五体満足ではなくなり、全てが立つことすら不可能となる。

腕を元に戻し、すぐにガトリングにする。どうでもいいが、俺はガトリング教信者である。

ささっと残った奴にも始末をつけ、森の中に居ると思われる奴等の掃討に当たっている皆に念話で呼びかける。

『こっちに来る奴はこれ以上居なかったみたいだから始末しといた。そっちは？』

『二体始末した。周囲には何も居ない』

『こっちは四体だ。カートリッジを使って殲滅したが、木に火がついて大変だった』

だつたら変換しないで普通に攻撃しろよ。

『あたしは三体始末した。これで全部か？』

『それは分かんけど、一応探索してくれ。三十分探索して見つからなかったら戻るぞ』

結局、二体ほどのオークを始末して、俺達は村へと戻った。予想外の数だったため、彼等は報酬を元の三倍まで増やしてくれた。

「見るよ。これ、超大粒のダイヤの原石だぜ？」

人間の目玉程よりも少し大きい、巨大なダイヤの原石。カットすればもっと小さくなるだろうが、97管理外世界において、最大の部類に入る大きさだ。

こつちの世界でも一応は宝石類の扱いらしいのだが、産出量も多く、無色で加工も困難なことから、価格は低い。

この目玉程度の大きさでも、一ヶ月暮らすのが精一杯なんだそうだ。97管理外世界ならば一生遊んで暮らせるというのに。ちなみに、報酬はこれだけではない。宝石類での報酬がいいと言ったため、他にもある。

「これは……なんだ？」

シグナムが訝しげに眺めている、こぶし大の大きさの原石。

手に持って元素配列を確認する。元の世界でダウンロードしておいた知識によると、サファイアの原石。

恐ろしい事に800カラットはある。カットしても700カラットは必ずある。全部売ったらどうなる？

他にも加工済みのピジョンブラッド。10カラット程度だろうか？ちなみにピジョンブラッドは3カラットで1000万円以上の価値がある。

「すげー。これ、動かすと色が変わるぜ」

ヴィータが光に透かして遊んでいる石はアレキサンドライト。人間の目玉くらいの大きさがある。

少なくとも300カラットはあるだろう。元の世界に持ち帰ったらほぼ確実に戦争が起こる。あれがあれば一国が買えかねない。

「……シャマル。悪いんだけど、この星がどれくらいの大きさか計測出来るかな？」

「え？出来ますけど……時間がかかりますよ？」

「いいから。やってくれ」

計測の結果。この星の大きさは地球の六倍。だったらこの馬鹿げた宝石が産出される理由が分かる。

宝石は星の圧力が影響するため、これだけ巨大な星となれば、内部の圧力は地球の数倍以上だ。

1000カラットを超える宝石も結構産出されるのかもしれない。恐ろしい世界だ。

「みんな。残念なことにこの宝石は売れない」

「何故だ!？」

「こんなの売り飛ばしたら確実に戦争が起きる。あるいは家に襲撃が来るかもしれん。いや、砕けばいいのか？」

アレキサンドライトも3カラット程度ならば億はつかない……かな？しかし、3カラットに砕いても100個の破片が出る。

サファイアもあれを丸ごと売ったら大変なことになる。砕かないといかん。

まともに売れるのはピジョンブラッドだけ。他のは全部が全部、国宝級だ。

「というわけで、宝石は砕いて売ることにする。それでだな、この世界には魔王が居るらしい」

「何だと？」

「ほんとにゲームの世界なんじゃねえの？」

「後でアイス買ってやるから黙ってる。それでだ、この魔王だが、略奪の限りを繰り返し、国も幾つか滅ぼされてるらしい。」

つまる所、国宝級のお宝もあるってわけだ。そこから宝石だけを貰っていいこう。なあに、魔王を倒せば、この世界では英雄だ。だったら、少しくらいお宝を貰ってもいいはずだろ？」

不承不承といった様子だが、全員が納得したので、魔王城らしき場所へと呐喊。  
襲ってくる魔物を始末しながらも進む。

「くくく……よく来たな勇者よ。だが、魔王様の所へは進ません！」  
「わりい、俺達勇者じゃねえや。強盗だよ」

両腕を細身の高周波ブレードに変換。背部飛行ユニットを全力で吹かし、一気に接敵する。  
そして、十字に切断。弱すぎる。

「ぐぐぐ……見事だ強盗よ。だが、魔王様には勝てんぞ……」

顔が半分になつてるのに良く喋れるな。  
そのまま進み、なにやら偉そうな魔法生物と接触する。  
人間のようにも見えるが、角とか生えてるし人間じゃないだろう。

「ククク……よく来たな勇者よ。さあ！我が腕の中で息絶えるがいい！」

「誰がやる？」

「あたしがやる！」

「いや、ここは烈火の將たる私が先陣を……」

「いやいや、盾の守護獣たる俺が、矛となって皆を守ろう」

「ここはジャンケンで決めよう」

魔王の前で、ジャンケン開始。勝ったのはシグナム。

「シグナム。喋れる程度に痛めつけるんだぞ」

「分かっている」

結果。戦闘開始から三分で相手は負けた。

強いだの、私はこの程度ではないとか言っていたが、シグナムがカートリッジを使ってからはすぐに負けていた。

「おい、魔王。宝物庫は何処だ？」

「……………」

何も喋らないので、体に電流を流した。

「あげげげ！……う、後ろ！王座の後ろ！」

「あんがと」

俺の出せる最大電流を流し込むと、魔王は一瞬で蒸発した。

ちなみに、宝物庫の中の宝石だが、少なくとも2つはあったとだけ記しておこう。



## 第七話

「ただいま」

「おか……なんやそれ？」

ザッフィーと大人形態の俺と、シグナムが背負っているデカイバツグ。

それを下ろし、開いて中から宝冠を取り出し、はやての頭にかけてやる。

「似合うぞ」

「おー。なんや？おもちゃでも作っとったんかいな？」

「それ、全部本物だぞ」

額側の目玉程の大きさもあるルビー。そこから順に、サファイア、ダイア、エメラルド、トパーズといった風に左右対称でつけられた宝石。

それを取り付けてある、優美な装飾の施された白金の宝冠。億は下らない代物だ。

「あと、大人形態の俺のデコイを作ったから、そいつを宝石を売りに行かせる」

ドラクエっぽい世界で砕いておいた、一粒が五カラット程度のアレキサンドライトが50粒。

一先ずは半分ほど売り飛ばし、全員に平等に分配するとしよう。

「どこからこんな出してきたん？」

「ん。別の世界に行ったら、城っぽい所に出ちまってな。勇者だとか間違われて、魔王を倒すことになっちまったんだ。

まあ、困ってる人を見捨てるのも忍びないからな、魔王だけ始末して、いらないうって言ったんだけど、報酬としてもらった」

無論。真っ赤な嘘である。

「んー……危険なことをしたんは怒るべきなんやけど、助けは人の為ならずっていうしなあ。これは不問にしたるさかい」

「オツケーボス」

その後、売り飛ばした宝石のお陰で世界一の大富豪になれたのは言うまでも無い。

俺達が世界一の大富豪になってから一週間。ヴィータがアイスを食べ過ぎて腹を壊した以外に特筆すべきことは特に無い。

「で、俺は思うんだが、少しくらいお金を豪勢に使ってもいいと思うんだ」

「札束を風呂に浮かべるのか？」

誰がそんな悪趣味を事をやるか。

「ほら、ラーメン屋で大盛り頼むとか……」

「それが豪勢だとするならば、お前は随分と貧相な生活を送ってきたのだな」

「意味もなく通販しちゃうとか」

「結局誰かが使うのだから無駄ではないだろう」

「もう！シグナムさんたら融通が利かないのね！」

「気持ちの悪い声色と口調はやめろ。お前の容姿と似合っている所為で逆に気持ち悪い」

悪かったな。女みたいな顔してて。

「んじゃあ、あれだ、無意味にパチンコするとか」

「勝つたらどうするのだ」

「主に新しいゲーム機が増えることになる」

ん。といった風に、俺の手の中にあるPSPっぽいゲーム機を指し示す。

「勝ったのか」

「勝っちまった」

4万使って11万勝ったぞ。

「欲しいものを買い捲るとか」

「あるのか？」

「無い」

欲しいものは全て購入済みだ。というか、世界一の大富豪になる前からクラッキングによって大金持ちではあったのだ。  
欲しいものと言えばパソコンだが、俺の意思で直接ネットにつながるのだからいい。

「えっと、ヴィータに何かプレゼント上げるとか」

「永遠の絆・純潔。を示すダイヤモンドをヴィータにやっていただく」

「……ヴィータをアイスで餌付けするとか」

「主はやての命令でヴィータにアイスはやれん」

「もういい！」

叫んで、俺はヴィータの部屋に突入した。アイゼンで木っ端微塵にされた。ちなみに、比喻表現ではなく本当の話だ。

「ヴィータアアア……愛してええる！」

「うるせー！」

壁に壮大な血の染みを作りながらも呐喊を続ける。

「大体なんなんだお前は！？あたしの何処が好きなんだよ！」

「全てだあああ！一目見た時から好きでした！いや、違うね！前世から好きだったね！」

「わけのわからねえ口説き文句をいつてんじゃねえ！」

しかし、前世から好きだったというのは紛れも無い事実である。

「それでも俺は叫び続ける！ヴィータアアア！！愛してえええる  
！」

「うつせー！」

そんなわけで、俺達は金持ちになっても変わらない。

「はやてー、はやてー。ヴィータが冷たいんだよう」

「あんなあ、あれじゃあ変質者やで？」

「別に変質者って思われてもいいさ。俺は兎に角ヴィータが好きだからな」

「そーいえば、せつちゃんは危ない人やったな」

「まーな。はやても好きだが、生憎と雇い主に手を出すような奴じ

やないぞ。

あと、一生添い遂げるって言うのも無理な話しだしなあ」

「なんでや？浮気の気でもあるんかいな？」

「ん？単純な話、俺とはやてじゃあ寿命に違いがありすぎる。俺は不老不死だからな。操を立てる何ぞ無理な話しだし」

事実。俺は不老不死だ。成長はするのだが、それはあくまで擬態。やろうと思えば一分後に成人男性になることも可能だ。今の子供の姿が通常状態となっただけであって、その通常状態というのを変更すればいいだけの話だ。

「ほわー。ホンマかいな？」

「まーね。木っ端微塵になっても治るよ」

空気中に飛散したナノマシンが一つでも残っていれば、そこから自己増殖できるからだ。

そもそも、俺の莫大な魔力は体を構成するナノマシンが魔力を生み出しているからだ。

一つ一つは平均的な魔道士の生み出す魔力の半分程度でしかないが、全身の細胞全てがリンカーコアなのだ、魔力量が馬鹿げているのは当然だ。

「うちの家族はホンマに凄いのはっかやなー」

「実を言うと、はやてのリンカーコア出力も馬鹿げてる。下手な魔力炉よりも出力があるぞ」

これは事実だ。今現在の出力ですら管理局のいうニアSランク相等的なことから、成長したらどうなる怖い。

「ほら、あれだ。ほぼ絶対零度、150フィート四方の広範囲完全凍結殲滅呪文とか使えるぞ。多分」

「私は吸血鬼になった覚えは無いで」

「このネタも分かるのか」

「呪文も覚えとるよ。漢字書きのほうだけ」

「あんなわけの訳分からん呪文を覚えてるほうが凄いと思うぞ。一応、雷の暴風の呪文なら知ってるけど」

「ほう、言ってみいや」

「ラステル・マ・スキル・マギステル。ウエニアント・スピリト  
ウス・アエリアーレス・フルグリエンテース  
クム・フルグラティオーニ・フレット・テンペスタース・アウス  
トリーナ・ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス」

「下らんことに脳のリソース使うもんじゃないで」

「というか、一回口に出した言葉が忘れられないだけだ」

意外な欠点。この体、ハイスペックすぎて一度覚えたことが忘れられない。

どっちかというとパソコンに近い。削除しても何処かしら痕跡がある。口に出した言葉など削除不能に近い。

実の所、しっかり思い出そうとすれば一度見ただけの事も明確に思い出せる。俺はパソコンか？

「便利な頭やなあ」

「まーね」

「どうでもいいけど、先生の方の指導キー使ったのは何でや？」

「雷の暴風を使うのがアイツしかいないから。闇の吹雪ならリク・ラク・ラ・ラック・ライラックになるぞ」

「なるほど。じゃあ、火の呪文ならメイプル・ネイプル・アラモードになるんかいな？」

「ならん」

「なんでやねん!？」

「気分！」

「デイク・デイル・ディリック・ヴォルホールにはならへんの？」

「指パッチンするならなるぞ」

そんなこんなで、魔法先生な漫画の話題を何となくはやてと繰り広げていると、ヴィータが居間へとやってくる。

「ヴィータ！」



「な、なんだ？」

びくつと、怯えたような様子で振り返るヴィータ。

「俺、怖がられるような事なんかしたっけ？」

「あたしじゃなかったら泣いてるぞ」

「ヴィータだからこそ、ああして俺の愛をささやいてるんだ」

「あれがささやきやつたら、せつちゃんの大声はどんなもんやるな」

「それこそ銀河中に響き渡るような声だ。お前が好きだ！お前が欲しいiiiiiii！つてな」

「なるほど。それは確かに大声やな」

「それで。ヴィータ。どうかしたんか？」

「いや、水のみに来ただけだ」

「そうか。俺の思いに答えてくれるわけじゃなかったのか」

はあー、と、まるでキノコが生えそうな勢いで落ち込む。

周囲からは魂が抜けたようにでも見えるのだろう。なにやらはやてが慌てている。

「た、たいへんや！せつちゃんの口から何か白いのが！」

「お、おい！この白いの刹那の顔してるぞ！？」

なんだか、気持ちよくなってきた。何と云うか、体がなくなって、魂だけが空を飛んでいるような感覚だ。

「メディック！メディック！！！」

言葉と同時に。シャルが扉をぶち破るような勢いでやってくる。

「どうしたんですか！はやてちゃん！」

「大変や！せつちゃんの口から魂が漏れでとる！」

「わわわ！？な、なんですこれ！？」

なんだか、緑色が叫んでるけど、よく分からない。

ああ……このまま、意識を外にゆだねてもいいかなあ……。

「たった一つ……心残りよなあ……だが、赦そう……手に入らぬからこそ……美しいものもある……ではな、鉄槌の騎士よ……」

刹那の口からヌルヌルと白い何かがあふれ出していく。また、体に繋がっている線も細くなっていく。

「ヴィ、ヴィータ！こういうときはキスや！王子様のキスでお姫様は目覚めるんや！」

「あたしは女だ！」

「とにかく！きつとキスでせつちゃんは目覚めるはずや！さあさあ！ハリーー！」

「う、あ、い、あ……」

顔を紅くして、しどろもどろと言った様子のヴィータ。

彼女自身。刹那が嫌いではない、むしろ、好きな部類だ。

突然自分が好きだと叫び出したり、よく分からない理論で好きだと叫んでくるが、イヤだと思ったことは無い。

彼女自身、どちらかと言えば刹那に惹かれてはいるのだが、生憎とそう言った経験がヴィータには無い。

気が遠くなるほどの長い年月を生きていても、戦うためだけに生きてきたのだから、そんな事を知っているはずも無いのだ。

「ヴィータちゃん！刹那くんが死んじゃうわ！」

「あうあう……」

ヴィータの頭はオーバーヒート寸前だ。分かりやすく言うなれば、刹那とみんなの前でキスするなんて、頭がフットーしそудだよ。といった所であろうか。

今、ヴィータの頭の中はキスするべきかしないべきかで揺れ動いている。刹那には死んで欲しくない、だが、キスするのも恥ずかしい。

「う」

「「う？」」

「うわあああああ！」

はやてをソファーに押し倒し、頭の上に毛布を放り投げ、シャマルをぶっ飛ばして意識を刈り取る。

「よ、よし」

すーはーすはーと深呼吸をして、顔色が加速度的に悪くなっていく刹那の唇に顔を近づける。

これは治療の一環なんだと自分に強く言い聞かせ、ヴィータはキスした。

唐突に刹那がヴィータを抱き締め、そのまま口内を舌で蹂躪する。

「ん！？んんむ！？」

ヴィータの舌を刹那の舌が絡めとり、刹那がヴィータの唾液を奪い取る。

コクリ、と、刹那がヴィータの唾液を嚥下する。それに気付いたヴィータは抜け出そうと暴れるが、人外な腕力で抱き締められ、逃げ出すことが出来ない。

刹那の舌が、ヴィータの歯を、歯茎を、舌の付け根を、舌の上を、舌の横を、歯の裏を、舐め取り、舌を絡ませる。

一分ほどそうしていただろうか？既に暴れる意思もなく、されるがままになっていたヴィータは唐突に解放される。

「あ……」

離れたくない。一瞬そう思ってしまったヴィータは、キツと殺意にも似たような意思を込めた瞳で刹那を睨む。

テレ隠しという奴である。ヴィータ自身、気付いては居ないが刹那に惹かれているのだ。

「俺……死んでもいいかしんない」

感無量。その言葉がこれほど似合う様子があるだろうか？

今、刹那はやり遂げた顔をしていた。その様子に、ヴィータもあきれ返って何も言えない。

こんなとき、どんな顔をすればいいのか分からないの。このセリフがピッタリだ、顔を罵倒に変えればいいだろう。

「ヴィータ。俺はヴィータに殺されるなら本望だ。というか、誰だか知らん奴に殺されるくらいならヴィータに殺された方がいい」

変態。あるいは漢。人によって評価は分かれるが、今の刹那は兎に角漢だった。

そんな刹那に、ヴィータは素敵な具合にテンパリ、こんなセリフを口走った。

「せ、責任取れよ！」

「おうともよお！」

言ってしまったのだが、ヴィータは案外悪い気分ではなかった。あるいは諦めだろうか？

兎角、ここにカップルは誕生した。いや、誕生してしまったというべきだろうか？

ちなみに、はやては既に布団を押しつけて一部始終を見ており、シヤマルも意識を取り戻して見ていた。

ザフィーラも部屋の隅で気配を殺して見ており、扉の影からはシグナムが顔を覗かせている。

つまり、この家に居る人間全てに一部始終見られており、ここに八神家公認カップルが誕生した。

「あつ……」

しかし、当の本人がそんなに耐えられるはずがなく、顔を真っ赤にし、目はまるで漫画のようにグルグルと回り出す。

「アイゼン！」

『J a w o h l 』

普通なら、仲間に攻撃を加えようとする主をグラーフアイゼンはアームデバイスでありながらも止めただろう。

しかし、今の主には反抗してはならない。あるわけもない危機察知能力に従い、グラーフアイゼンは起動した。

「うわあああ！！！！アイゼンの頑固な汚れにしてやるうううう！！！」

そんなこんなで、今日も八神家は平和です。

## 第八話

「というわけで！管理外無人世界へとやってきました！」

転送に転送を繰り返し、時空管理局が把握すらしていない無人世界。地球と同質量の惑星でありながら、惑星の表面90%以上が砂漠で覆われている、それ以外の箇所は岩盤だけだ。

「どういうわけか説明しろ」

烈火の将シグナムさんのアイアンクロー。ちなみに、シグナムさんはリングを砕けます。

また、ザフィーラもシャマルもヴィータも俺も砕けます。ぶっちゃけるとはやても砕けます。ビバ肉体強化魔法。

「えつとですね、はやての足も治ってきて、肉体強化魔法を使えば歩くくらいは出来るようになったので、防衛プログラムを破壊しようと思ひまして」

「おお、そういうば、そいつを壊せば完璧な夜天の書に戻るんやっとな。それで、管制人格とやらも出てくると」

「そうです。主はやて」

「それで、管制人格さんはなんて名前なんや？」

「ねえよ。管制人格には名前がねーんだ」

「なんやて！？」

一瞬。パン職人の青年が見えたような気がする。

「せやったら、私が名前つけんといかんのやな」

むむつ。と悩み始めるはやて。まあ、戦闘終了までに考えてくれればいい。

「まずだけど、闇の書の防衛プログラムは今まで蒐集した魔法で防御を図って来る。恐らく、積層構造の防御フィールドを展開し、コアを何らかの方法で守護しているはずだ。

だから、最初に積層構造のフィールドを突破。突破後にはやての管理者権限で防御フィールドの再展開を阻止。その後に、防御プログラムのコアを破壊。

そうすれば、後は夜天の書の修復プログラムが以前の姿に戻し、完璧な夜天の書に戻るはずだ」

「つまり、主はやてはここに居ないといけないと言う事か？」

「そうだな。だから、はやての傍にはザッフィーとシャルルが居てくれ。

防衛プログラムはお前等の元になった夜天の書から生まれたもの。触れれば、最悪取り込まれかねない。

お前らが消えるのは嫌だ。特に、ヴィータが取り込まれたら俺は即座に助ける。助けられなかったら自殺する。

シャルルとザッフィーは逃げる。取り込まれても助けん」

「分かっている」

「ふふ、素直じゃないんだから」



シャルとザフィーラは分かっている。自分達に取り込まれることなど無いと刹那が信じていることを。

盾の守護獣たるザフィーラが、守りぬけぬ事など無いのだと。

「シグナムは気合で何とかしろ。九頭竜閃が使えたんだから何とかなる」

「分かっている」

「ヴィータは俺が死なない限り守るから安心しろ」

「おう……」

「よし！ヴィータに萌えたお陰で全力全開！今なら萌え魔法だって使えるぞ！ロソリー・ラブリー・シンメトリー・プクンジップで・ロリポップー！」

「気持ち悪いわ！魔法少女のようなヤクザめ！」

「て、てめえ！？俺のどこがヤクザだってんだ！？」

「何故ここで音声魔術師なん！？とにかく、管理者権限使って防衛プログラムだけ切り離すで」

はやてが三十メートルほど離れてブツブツ言ってるが、別に集音していないので聞こえない。

前方役11メートルに現れた大きな魔力の塊。とはいっても、世界を滅ぼしかねないほどには思えない。管制人格起動に必要な400ページしか蒐集していないからだろう。

しかし、展開されている四枚の魔力障壁は強力の一言に尽きる。

「行くぞッ！」

言葉と同時に、俺は思いっきりネタに走った。数日前から準備に準備を重ね、俺の体積と同程度のナノマシンを小指の先ほどに圧縮。それを40個程用意した。それらを空中に散布。そして、再度集積し、俺は四メートル程度の鋼の巨人へと変貌を遂げる。

「ホ、ホワイトグリント！」

白き閃光の名を関するAC。流石にコジマ粒子は無いのでPAは無い。だが、周囲には緑色の魔力障壁を展開した。わざと可視化してだ。

ちなみに、ホワイトグリントはfAの方である。だって、fAの方が好きだし。なんて事を考えていると、防衛プログラムから触手攻撃が放たれる。

回避するべく魔力を左側のユニットから噴射し、0から一気に800キロ以上へと加速する。脳処理速度を上昇させ、一秒間を約35秒程度に感じるほどに加速させる。

両腕のアサルトライフルから、鋼の牙が連続して放たれる。だが、それらはいとも容易く防衛プログラムの展開した障壁によって防がれる。

「ならば呐喊する！」

背部噴射ユニット及び、腰部噴射ユニット、また、全身のスラスターへと魔力制御を集中させる。

集約され、解き放たれる魔力噴射。これぞMOB！とか名づけてみる。瞬間的な加速により、触手の攻撃は全てが届くことが無い。

右腕のライフルをパージ。本来のアセンブルとは違い、射突形ブレードが装着される。俺の意思で制御できるのだから、武装など幾らでも出せるのだ。

「おうらあっ！」

一枚。最前面に張られていた障壁が砕け散り、直後に障壁が再生される。

「はやて！？管理者権限からの割り込みはどうした！？」

『駄目なんや！再生速度が速すぎる！最低でも二枚を瞬時に破壊せんと、停止命令が出せへん！』

「オーケー。ならやつたろうじゃんか」

周囲を覆っていた魔力障壁を前面へと回し、障壁の密度を飛躍的に高める。

「シグナム！ヴィータ！俺は今から呐喊する！最低でも二枚は破壊出来る筈だから、それから二人で同時に最大攻撃を仕掛けてくれ」

「分かった！」

俺は呐喊する。こちらへと高速で飛来する触手を上空へと噴射跳躍する事によって回避。

そのまま、上空から重力加速度を伴って俺は落下する。左腕、右足、腰部跳躍ユニット、胴体。その順で触手に貫かれる。

「刹那ああっ！？」

「問題ない！」

右腕のバンカーを炸薬の炸裂によって打ち出す、障壁を一枚突破。その直後に、今制御できる魔力全てを回したバリアブースト。しかも、前面一箇所に集約する事によって、破壊力よりも貫通力を重視して組み上げた魔法により、二枚目の障壁が突破される。

「翔けよ隼！」

何時の間にボーゲンフォームに変えた？

「シュツルムファルケン！」

放たれる矢。空を切り裂く一筋の銀閃。正面から障壁と激突し、一瞬の拮抗すら見せずに障壁が粉碎される。

「くっ……レヴァンティン」

大量の蒸気を噴出しながらも、レヴァンティンは待機モードへと自動で移行する。

それも当然だった。この作戦で使用したカートリッジのシャマルのものではなく、俺の作ったもの。

突貫作業でデバイスを強化したが、それでも一度の使用で熱暴走に陥る程の馬鹿魔力。

「轟天爆砕！」

グラーファイゼンの先端部が消え、数回りハンマー部が巨大化する。更に、それを振り上げると同時、柄が長大化し、ハンマー部も馬鹿

げた大きさとなる。

「ギガントシュラークッ！」

障壁を紙のように打ち破り、更には防衛プログラムの前面部を徹底的に破壊する。

「S11起動！」

「なんでそないなもんがACにあるんや！」

『ノリ！』

実際は俺の魔力を集積した巨大なカートリッジとでもいえばいいだろうか？

内部の沈静化している魔力を暴走させ、周囲に大規模爆発を起こす兵器だ。

俺が二日もかけてチャージした魔力。そこらの艦の魔力炉を自爆させるよりも強力だ。

流石に皆まで始末してしまつては仕方ないので、周囲三十メートル以内に爆発が収まるようには配慮してある。

『総員対シヨック姿勢！これより自機は自爆する！脱出は完了しているから安心しろ！』

言葉と同時に、全員がシールドを展開。はやてはシャマルとザフィーラ。更には本人のシールドという三段構えだ。

直後。世界から音が消えた。光が視界を埋め尽くし、直後に世界の終わりのような爆音が鳴り響く。

「うおおっ!？」

あちこちから悲鳴が聞こえる。今の一撃、恐らくは防衛プログラムを半分以上破壊に追い込んだ筈だ。生身となった俺は、背部飛行ユニットを展開。同時に右腕を巨大な魔力砲台へと変換する。

『はやて!聞こえるか!奴はまだ生きていやがる!そっちの撃てる、最大威力の砲撃を使ってくれ!』

『分かった!』

『シャマルとザフィーラは砲撃直後にコアを強制転移。今でも可能だが、可能性は限界まで高くする。

上空へと強制的に転移し、出来うる限りの高度まで持っていてくれ、最低でも成層圏くらいの距離はとってくれ!』

『分かったわ!』

『任せろ!』

バイザーを生成。網膜投射でも情報は閲覧可能だが、今回は僅かなズレすらも赦されない状況だ。

ほんの一ミリのズレが失敗に繋がりがねない。正直な話、フルボツコにしすぎた気もするのだが、相手は無限の再生機能を持つ相手。完全な対消滅を行える俺のアルカンシエルもどきでなければ、完全な消滅は不可能なのだ。他の皆が破壊しても、見た目だけであって、内部のプログラムは変わらないのだ。

「響け終焉の笛!ラグナロク!」

上空へと舞い上がったはやての足元に展開される、巨大なベルカ式の魔方阵。

順三角形の頂点の円形に巨大な魔力スフィアが形成され、膨大な魔力があふれ出す。

「はあああつ！……！」

ブレイカー。というセリフは出ず、気合の一声と共に巨大な魔力砲撃が防衛プログラムに降り注ぐ。

閃光と同時、巨大な爆発音。Sランク魔道士が戦略兵器って言われるも分かるね。だって、さっきの砲撃だけで街が消し飛ぶし。

「本体コア露出……！」

「強制長距離転送！」

ザッフィーがシャマルの補助をし、上空約39キロメートルへと転移される。

「月は 出ているか？アルカンシエル！いつくぜえっ！」

放たれた巨大な砲撃。俺の砲撃は流石に百数十キロを対消滅とまではいかないが、

最大で二十キロ程度を完璧に消し飛ばすくらいは出来る。全魔力を放出すれば地球くらい滅ぼせそうだが、次元震発生の可能性が高い。制御自体は出来ても、俺の体が支えきれない。変形して砲台のように体を作り変えればなんとかなりそうだが。

「……やりましたよ！防衛プログラムの完全消滅を確認しました！」

シャマルが溢れんばかりの笑顔で告げる。その一瞬の後に、俺達全員の歓声が無人世界に響き渡った。

無人世界から帰到し、俺達は八神家の居間でぐったりしている。

本来ならここでパーティーでも開きたい所だが、そんな事をするほどの余力も無い。ちなみにグレアムとかの方は、既に連絡を取って黙らせてる。闇の書への復讐をしたかったわけではないのだ。

何しろ、俺は体の維持に必要な魔力しか残さないで全力戦闘を行ったのだ。というか、ACもどきを作る必要があっただろうか？

放出魔力だけで魔力炉並みの出力はあるのだが、前々から用意していたACもどきとかで半分近く魔力を使った。何してんだろ俺。

ちなみに、用意しておいたナノマシンを集積したものの魔力は、用意しておいただけであって、魔力は空っぽ。作り出した直後は魔力が空っぽなんだ。

基本的な武装は余剰魔力で作ったナノマシンを圧縮してあるから簡単に作れるんだけど、そこらへんの構成が難しいのね。ちなみに俺の体重は100キロを超えている。

また、シグナムにヴィータの負担も大きい。何しろ、カートリッジの魔力は何れにしる自分で制御したのだ。

俺のような魔力炉に等しい出力の魔力を扱っただけで、その技術の高さがい知れる。管理局の局員なら暴走させていた所だ。

シャマルとザフィーラは常に俺達の補助をしていた為、肉体的疲労は少ないが精神的疲労が大きい。

また、最後に大技を放ったはやての負担が最も大きい。何しろ、初めて使った攻撃魔法があれだけの砲撃魔法だ。

攻撃魔法は瞬間出力が重要なため、はやての未成熟なリンカーコアにはかなりの負担を強いてしまったようだ。今はソファで眠って



いる。

「あー……やべっ、手が解けた」

何時の間になくなっていた右腕。これでは一時間もしないうちにバラけてしまう。

仕方なしに、三歳程度の大きさまで縮む。いや、これはこれで中々にいい。

「ヴィータ。おねーちゃんって呼んでやろーか？」

「だったらあたしは弟って呼べばいいのかよ」

「いや、貴方とか、ダーリンとかで呼んでほしー」

「恥ずかしいからヤダ」

「そうか。そりゃあじゃんねんだ……。って、何だこの体は、舌足らずで気持ち悪いぞ」

外に出るときは黒髪黒目になっているのだが、家の中では銀髪オッドアイ。厨二主人公らしく、何故か中性的な顔立ちの俺は、女に間違われやすい。

そしてこの姿となった俺は、非常に萌えポイントが高いのだろうと思う。そっちの趣味がある人に見つかれば、誘拐されかねない。

別に自分の容姿を素晴らしいと思っていたり、自分を過信していたりはしないが、正当な評価くらいは出せる。

いってみれば、今の俺は素晴らしい男の娘だ。フリルのついた服を着れば、そりゃあもう似合うだろう。反吐が出そうだ。

そして、舌足らず。これは萌えポイントとして非常に点数が高い。

原作でのなのはとの邂逅でうまく言えないヴィータに萌えたものだ。

「うーん……早急に魔力の補給をせんとな」

そういえば、作ったカートリッジが余ってたかと思い、飲み込んで分解する。微々たる量ではあるが、姿を維持するには問題ない量を補給。

思うのだが、魔力には生成限界がある。それは生物として当然なのだが、俺は殆ど機械だ。何故魔力の生成限界がある？

ちよっと考えるだけで、ナノマシンの過剰劣化を防ぐためとか、元は生物と言う事を忘れないためか、あるいはリミッターか。

こんな風に幾らでも考えは出るのだが、結局答えは出ない。あるのは解釈だけ。そういう事だ。

「うーん。周囲のナノマシン集めるのもちょっと危ないし」

というか、先の戦闘で大分消費したので、空气中に散布したナノマシンも少ない。主に俺の自爆が原因で。

たとえ全てを集めきつても、大した量は確保できない。というよりも、今の状態の俺に取り込むのは危険だ。

全身のナノマシンを大分酷使しているので、体のバランスが保てなくなる可能性が高い。

まあ、一日もすれば完璧な状態にまで修復されるだろうと自己診断の結果が出るのだから、それまで待つことにしよう。

「そういえば、防衛プログラムの修復までどれくらいかかるのだ？」

「ん、三日かな。それくらいもすれば治るだろ。さつき軽く調べたけど、物凄い速度で修復してる。」

前とはほぼ別物のプログラムになってたから、現在のプログラム

を基にしたものだから、完璧な夜天の魔道書に戻るだろ」

「そうか。主はやてが無事なら、それでいい」

とカートリッジ回りを調べ終えたシグナムが、そういつて微笑む。本当に忠義の騎士って感じだよな。まあ、全員が全員そうなんだけどさ。

「さて、そろそろはやても目が覚めるだろ」

そういつた直後、はやてが身じろぎをして目を開く。

別に直感とかで言っただけではない。はやての脳波から 波が検知されなくなっただけだ。

随分と人間離れしてるな、俺。でも、そこに疑問を感じない辺り、俺って適当な人間だったんだな。

ちなみに、守護騎士のみんなの脳波も測定出来るが、未知の脳波だらけで測定の意味が無い。

「おはようさん。せつちゃん何で小さなってるん？」

「気分。おねいちゃんって呼んだるか？」

「おお、なかなかええ気分やな。これからはそう呼ぶんや」

「なんだかよく分からないけど、おねいちゃんって呼んでやろう」

そんな感じで、ちよつと前まで戦いを繰り広げていたとは思えない穏やかさがある。

「はやて、足はどうだ？」

「特に変わらへんよ。石田さんの話やと、あと一ヶ月もリハビリすれば、歩けるようになるって」

「そうか」

肉体強化の魔法を使えばあるけるのだが、常時かけているわけにはいかない。

それに、体の負担が大きくなる。たとえ強化しても、足にかかる負担は同じなのだ。

無理に歩けば、筋肉を傷めて治るのが遅くなる。まあ、負担をかけすぎなければ、足が治るのも早くなる。超回復という奴だ。

「祝勝会でもするか？」

「あ、ええなあそれ」

「よし、だったら買い物に行こう。金は俺が全額負担する」

「お、太っ腹だな、刹那」

「別になあ……というか、お前等世界有数の大富豪なんだから、このくらいの出費問題ないだろ？」

まあ、別に無駄な豪華な暮らしをする必要も無いんだけどな」

まあ、そんな感じで、俺達は買い物に出た。ザフィーラは荷物持ちなので、人間形態だ。

「正直な話、男に犬耳とか無いわー」

「……別に好きで犬耳がついているわけではない」

まあ、今は耳と尻尾は消してるんだけどね。

「シグナム」ポニーテールの方程式」

「刹那という名前」厨二病の方程式」

「ぐああああ！」

「どうした刹那！？というか、ポニーテールの方程式とはなんだ！？」

思わぬ反撃を食らった。

「緑」目立たないの方程式」

「シャル」料理下手の方程式」

「ふ、二人とも酷いです！」

事実だけどね。

「ヴィータ」愛してる」

「それ、方程式でも何でもないやん」

「けど、俺は愛してるんだ！おねいちゃんも認めてくれてるんだろ！？」

「ひとまず、二歳児のせつちゃんが言ってもおままごとみたいやで」  
悪かったな。

## 第九話

「というわけで、巷で人気の翠屋まで来たよ！やったねはやちゃん！」

「お友達が増えるよ！ってか」

「打てば響くってこう言う事を言うんだな。はやてにネタふりすると、大抵帰って来るから面白いぞ」

他の皆は不思議な顔をしている。まあ、ネットとかするような奴らじゃないしな。

更に言うと、原作を読むような奴等でもない。あんな本を読んでも奴等が居たら、俺は心臓麻痺で死ぬ。

「まあ、とにかく入るとしよう。この店のシュークリームとケーキは凄い人気らしいぞ」

「そついやそうやな。よし、せつちゃん。シュークリーム全員分とケーキを買ってくるんや。六号でええよ」

「オーケー」

ちなみに、ケーキの大きさは号で表され、六号は基本的なサイズで、大抵は何処の店でも打っている。

九号や十号ともなると、専門店で無いと売っていない。というか、そのサイズになると、車が無いと買えない。

「よし、神崎刹那二等兵呐喊します！」

「おこちゃまがそう言ってもおもしろくないで」

はやての呟きを黙殺し、扉を押して中に入る。

今気付いたが、この大きさだと、カウンターの人に気付いてもらえないのではないだろうか？

「すいませーん」

「はいはい。お使いかしら？」

出てきたのは、異常に若い奥様。高町桃子さんであった。本当に何歳だこの人？

「えっと、シュークリーム六個に、ホールケーキ六号。ああ、ケーキはクリームで」

代金を支払い、暖かな微笑を背に店を出た。三歳児くらいだから、お使いに見えるよなア。

「よし、勝って来たぞ」

「字が違っんやないか？」

「いいや、戦闘民族の店にはオールウェイズ・オン・デュー常任戦場の心構えでなければいけない」

「それ、海軍やないんか？」

「こまけえこたあいいんだよ」



こんな感じで、買い物を終え、俺達は家に戻った。

「えー。こまけえこたあいんだよって事で、兎に角、防衛プロゲラムとの戦闘、皆さんおつかれさまでした!」

乾杯の音頭を取り、珍しく家でも人間形態のザフィーラに酒を注ぐ。ちなみに、酒を飲んでいるのはシグナムとザフィーラだけだ。実際、ザフィーラは俺が無理やり飲ませている。

「こ、これは!?!」

煮凝りの失敗作らしき料理。恐らくはシャルルの作だろう。恐る恐る、口にしてみる。

突き抜ける不味さ、何故か化学調味料や、合成甘味料の味。

「ねるねるね!」

「不味ッ!?! テーレツテレー!」

落ち込んでいるシャルルは無視した。

「普通の調味料を使っているのに、何故化学調味料や合成甘味料の味がするんだ……不思議すぎるぞシャル……」

この家にはハイミーとかはないはずだぞ。

「シャルクツキングをネットで売りに出せば、きっと殺し屋からの注文が相次ぐぞ」

「そ、そこまで言わなくてもいいじゃないですかあ！」

「いいや、言うね！だって、この煮凝りモドキ、最高傑作だろ！？前の奴は、俺以外全員気絶してたし！」

気付いたら朝とか、怖すぎる。

まあ、シャマルの料理は無視して、はやての手料理を食うでしょう。

「うまい！何処に嫁に出しても恥ずかしくないぞ」

「ややわー、せつちゃん」

強烈な張り手を喰らった。首が折れるかと思ったぞ。今の俺は三歳児なんだから、もう少し手加減して欲しい。

というか、その腕力、肉体強化魔法使ってるだろ？明らかに子供の腕力じゃないぞ？

「ところで、せつちゃんっていうと、神鳴流とか思い出すんだ」

「羽もあるしな」

「でも残念、今の俺は女じゃない」

「なれるんやろ？」

「なれるぞ。ならないけど」

今の俺は群体に近く、一つの意味で体が構成されてるけど、結局は配列を変えれば別物になれる。

今までは大人になったり子供になったりと、その程度にしか使っていなかったが。

「なんや、残念やな。せつちゃん、神崎やなくて桜咲やったらよかったのに」

「俺にスパッツを履けと申すか」

「さよう」

「そのうちな」

「やるんかいな！」

「気が向いたら」

ビーフシチューを食べ終え、フランスパンで掬い取るように、残った部分を食べる。

「びんぼーしょー」

「ほっとけ」

こんな感じで、祝勝会は楽しく終わった。  
後でヴィータにこっそりアイスをあげたら、はやてにバレてしまった。

五日後。一応の安全策として、本来よりも日数を取って完璧な状態で起動した。

「はやて、名前は決めたのか？」

「決めとるよ。教えたらんけど」

「まあ、どうせ後で聞けるしな」

「そーいうこつちや。大人しく見とるんや」

ペラペラと凄い勢いで捲られていく夜天の書。

「……出てこねえな」

「そやなあ」

何時になったら出てくるんだ？そう思っていると、本は最終ページまで行き着き、そのまま閉じられた。

「あれ？」

そう口に出した直後、背後から凄い音が聞こえた。なんていうのだろうか？棚に置いてあった金属部品をばら撒いたような音？

兎に角、慌てて台所に向かってみると、何故か足元の鍋やフライパンをしまう場所から、銀髪の美女が這い出てきていた。

「なるほど。管制人格は調理器具だったのか。で、なんの調理器具だ？はやてならすぐに分かるんだが」

はやてのグーが、刹那に炸裂する。

「なにしゃがるっ！？」

「そこはかとなくむかついたんや。なんか、カレーとか作るの調理器具のような気がして」

寸胴の事が。

「さて、立てるか？」

「……ああ」

管制人格の手を取って立たせてやり、少々ホコリで汚れたのが、軽くはらう。

「主。なぜ私はこのような所に？」

「……あつはつはつは！」

そんなの知った事かと、はやては笑い出す。凄い勢いで。事実。なんであそこに出たか分からないらしい。後に、今日の夕飯について考えていた所為だと判明したが。まあ、そんな事はどうでもいいかと思ひ直し、はやては目を瞑り、一つ深呼吸をする。

「夜天の主の名において、汝に新たな名を送る」

管制人格は、瞳を閉じて膝をつく。

「強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール」

はやてって、この歳の割には色々な本を読んだりするからな。

なんというか、そういった言葉なんかには普通の人間よりも詳しいかも知れない。

「リインフォース。それが、貴女の新しい名や」

リインフォースというのは、支えるものという言葉の意味があり、また背中を押すといった解釈も可能。

簡単に言ってしまうば、助力者、そういう言葉とも取れるような意味があるのだ。

## 第十話

「第一部完！」

「いきなり何をいつとんのや」

「なんとなく。それはそうと、何で俺はこんな所にいるのかな？」

るーと、涙を流しながら周囲を見回す。

ショーツ、ブラジャー、キャミソール、所謂女性用の下着。

つまる所、ここはランジェリーショップである。何で俺はここに居るんだろっね？

「それはな、簡単なことや。荷物持ちや」

「ソウデスカ。チョットソトディップクシテクルヨ」

「十分以内に帰ってくるんやで。戻ってこんかつたら夕飯はパンの耳だけや」

エスケープ失敗！まあ、実際の所、俺は飯を食べなくても死にはしない。

何故か魔力の生成量が落ちるので飯は食いたい所なのだが、どうやって消化しているのだろうか？

ひとまず、店から出て、横道に逸れて人目が無い事を確認する。よし、変身開始。

髪は更に長く、腰辺りの髪を脹脛まで伸ばす、色は艶やかな紫色に。体軀は大きく、すらりとした長身。170cm程度の長さにもまで伸ばす。

顔立ちは怜悯な印象を与えるように、瞳の虹彩の形を弄り、四角形に変える。

服装はフリース生地 of 黒い長袖。肌色のジーンズ。そして、最後に眼鏡。

「これで、よし」

変身し終えた俺は、店内に戻る。女だから大丈夫さ。

そして、車椅子のはやての元へと向かう。はやても歩けるようにはなっているのだが、石田さんに会つと、アウトになるので外出時は車椅子だ。

「はやて。一服は終えました。リインフォースはまだですか？」

「え、あれ？せつちゃん？」

「何を言ってるのですかはやて。私は貴方のサーヴァント。ライダーです」

「は？せつちゃんなん？」

「そうですが、私の真名は気安く口に出さないほうがよろしいですよ」

「いや、そこまで乗られると困るんやけど」

「そうですか」

なんて事を離していると、試着室が開いてリインフォースが出てくる。ちなみに、今回買いに来たのはリインフォースの下着だ。



だが、荷物もちに俺を使うのはいい、だからって、この店内にまで連れ込まないでくれるかな？

ラインフォースはそういった事に案外頓着しないが、俺は頓着するんだよ。

今の俺には性欲など微塵も存在しないし、ロリコンだからアレだが、目に毒だ。男とはげに悲しき生き物よ。

「？主はやて、こちらの方は？」

「せつちゃんやで」

「はやて。私の真名は軽々しく口にしないと……」

「だから、せつちゃんもサーヴァントやないし、うちの腕にも令呪は……あるな」

はやてが掲げた右腕には、丸の各部を等間隔で抜き出したような形に刻まれた令呪。

淡くオレンジ色に輝いており、これを使用する事によって三度限りのサーヴァントに対する絶対命令権がある。

来いといえば、地球の反対側にいようと空間転移で訪れ、次の一撃を最高の威力で放てといえば、限界以上の力を発揮する。

自殺しろと言えば、躊躇いもなく自分の心臓に槍を突き立て、どれだけ理不尽な命令でも従わせることが可能となる。

だが、この令呪。俺がナノマシンをはやての体表に貼り付けているだけなので、実は意味が無い。

「まあ……この馬鹿げた出力は刹那以外にはありえまい。なぜ、そんな姿をしているのだ？」

「女性用下着店で男でいるのは辛かったからです。荷物もちに関しては問題ありません。私の固有スキル、怪力Bによって、人並みはずれた腕力があります」

試しに、片腕ではやての車椅子を持ち上げ、頭の高さまで持ち上げる。

「この通りです」

「ものっそい馬鹿力やな」

「は、はやて……そう言わないで下さい」

「しつかり恥らうんやな。そやったら持ち上げなきゃええのに」

「いえ、キャラは忠実に再現すべきだと聞いたので」

「なんや、面白いやつちゃな」

フハハ、何を言いなさるか子ダヌキ。

「さあ、会計を済まして出ましょう」

「なんや？ライダーにも買ったるで」

「わ、私のような大女には勿体無いですし……似合うような物があ  
ると思えません。本音を言うと、最後の矜持くらいは守らせてく  
ださい」

「わかったわかった」

というわけで、俺達は店を出た。それから暫く歩き、食料品などを買い込み、家路に着く。

「っ!？」

唐突にリインフォースが振り向き、その直後に俺の魔力センサーが巨大な魔力の発動を察知した。

「どしたん？」

「次元跳躍反応……この世界に何かが無理やり突入してきた」

「……分かったぞ。スクライアー族が発掘したジュエルシードというロストロギアを輸送していた船が強襲されたらしい。

多分、航路に近いこの世界に漂流したんだろ?。どうする?。」

そう言った直後、はやては即座に反応する。

「全員でそのジュエルシードの探索や。ただ、管理局の人間に見つかる和不味いんやろ?」

出来るだけ、魔法は使わんで探すんや」

「オーケー、ボス」

「了解しました。主はやて」

そんなこんなで、守護騎士+俺とはやてがジュエルシードの探索を開始した。

## 第十一話

ジュエルシード探索から二日目、ヴィータが二つ目のジュエルシードを発見した。

魔法を使わずに探索していたのだから、それなりの速さだと思う。

「よしよし、偉いぞヴィータ。それでこそ俺の彼女」

抱き抱えて、頭を撫でてやると、キツイパンチを食らった。

まあ、ヴィータも顔を紅くしてたし、嫌そうじゃなかったから、まんざらでもないんだろう。

「というわけで、ご褒美をやるう。さあ、さっそく41にいくぞ」

41というのは、アイス屋である。そうとしか言いようが無い。

前に居た世界のアイス屋と非常に似通った店の上に、装飾やらも似ているのだから手に負えない。

「よっしゃー！じゃあじゃあ、トリプル頼んでもいいか？」

「ああ、好きなだけ頼め」

というわけで、ヴィータにアイスを奢ってやった。

ヴィータ自身も金持ちなのだが、はやてによって財布の紐が握られているので、迂闊に金が使えないのだ。

ちなみに、財布の紐が握られているのはヴィータとシャルルだけである。

主にヴィータは買い食いをし過ぎるからで、シャルルは暗殺クッキングをする材料を勝手に買わせないためである。

尚、俺がヴィータにアイスを食わせすぎた所為で、強化魔法＋砲撃魔法を折り合わせた強力な絶招を喰らった事は余談である。ちなみに、絶招とは中国拳法の奥義だというのは、更なる余談だ。また、はやては拳法何ぞ習っていないというのは余談過ぎて鼻血も出ない。

ジュエルシード探索開始から五日。封時結界の展開とジュエルシードの反応が確認された。

「ま、魔王だ！魔王の誕生だ！」

「なにいつとるんや？」

「くっ！仕方ない、俺が魔王のコピペを書いといてやろっ」

高町なのは伝説

- ・ 3 砲撃 5 カートリッジは当たり前、 3 砲撃 8 カートリッジも
- ・ 犯罪者のホームランを頻発

- ・高町なのはにとってのホームランは捕縛の打ちそこない
- ・犯行前サイクルヒットも日常茶飯
- ・9連戦、兵力100倍差、隊員全員負傷の状況から1人で逆転
- ・ワンバウンドさせた犯罪者をヒット
- ・一回の砲撃で砲撃が三本に見える
- ・バインドでホームラン
- ・前に立つだけで犯罪者が泣いて謝った、心臓発作を起こす犯罪者も
- ・ホームランでも納得いかなければ再びやりなおす
- ・あまりにホームランしすぎるから仲間が捕縛しなければストライク
- ・そのストライクすらもヒット
- ・犯罪者を一睨みしただけで罪状が二倍に増える
- ・仕事の無い休暇日でも二人はホームラン
- ・デバイス使わずに手で打ってたことも
- ・自分の砲撃を自分でキャッチしてレーザービームで投げ返す
- ・犯罪者ランニングホームランなんてザラ、2回以上お手玉すること

とも

- ・ 一人捕まえるよりも管理局に帰る方が早かった
- ・ 砲撃をガードしようとしたS級魔道士と、それを受け止めようとしたAAA+級魔道士、AAA級魔道士、AA級魔道士の犯罪者ともども空の彼方にぶっ飛ばした

- ・ 民間人のヤジに反論しながら背後からの砲撃をガード

- ・ グッとガッツポーズしただけで5人くらい捕縛された

- ・ デバイスのスイングでハリケーンが起きたことは有名

- ・ 第四次世界大戦が始まったきっかけは高町なのはの場外ホームラン

- ・ 管理局の深い位置から最前線の犯罪者も処理してた

- ・ 戦艦の魔力砲撃を楽々打ち返してた

- ・ 自分の砲撃に飛び乗って管理局まで帰るというファンサービス

- ・ あまりにも仕事するので最初から最前線に立っていた時期も

- ・ 全力砲撃すると次元震が発生するので力をセーブしてた

- ・ なのはの砲撃に魔力炉用のレーダーが振り切れてしまうので仕事中は警戒されていた

- ・ 砲撃番付の打撃版誘導魔法に出場したがノーミスでパーフェクト

達成してしまいテレビ的にNG

・超重量の制服を着けながら仕事していたため戦闘後脱いだ制服を机に投げたら机が真つ二つになった

・名魔道士は砲撃が止まって見えるというのが高町なのははむしろ砲撃の魔力素運動すら見えた

・外れた誘導弾で犯罪者三名をノックアウト

・あまりホームラン打つと犯罪者が傷付くから打ちたくないという名言

・高町なのはには、居るはずの無い犯罪者が見えていたらしい

・高町なのはに一度でも攻撃を入れれば、その犯罪者は無罪放免というルールはもはや伝説。

・高町なのはの攻撃を三回避避すれば即管理局の最高評議会入りという破格のルールも達成できた人間はなし

・ハンデとして目を瞑って腕を拘束して足を地面に埋め込み、全身に拘束具をつけて戦線に入るルールも導入されたが全然ハンデにならなかった

「どうだ!」



ヴォルケンズの皆さんは顔を青くしている。そりゃそうだ、こんな人間じゃねえよ。

「というか、なんで未来が分かるん？」

「ああ、これ？適当に書いたただだから。単純に魔力量がはやてに並ぶくらいあったから」

その後、ヴォルケンズに追っかけまわされたのは全くの余談である。

## 第十二話（前書き）

何で昔の自分はこんな悪趣味な内容を書いたんだ……グロイ内容があります。

## 第十二話

「さて、魔王少女ジエノサイドなのは事だが、どうやらスクライア一族の子供を保護してるらしい。

スクライア一族特有の変身魔法でフェレットになってる事からすると、この世界と魔力の相性が悪いっぽいな。

多分だけど、そのうち時空管理局と接触するだろうから、そいつらとは関わらない方がいいだろ」

「その少女の呼称に関しては気になるが、意見については賛成だ」

「あたし達も一応言い訳は用意してるけど、調べられたらバレるだろうしな」

「俺も賛成だ」

「私も賛成します。はやてちゃんと一緒に居れなくなるのは寂しいですから」

というわけで、満場一致で賛成となった。はやても賛成だ。

集めたジュエルシードに関しては、適当に発動させて回収させるという事になった。

「というわけで、今日も頑張って回収しましょう」

まあ、そんなこんなで今日も平和です。

探索開始から十日。街でジュエルシードが発動した。巨大な木が街を蹂躪するという恐ろしい結果だった。

「よっしゃあああ！！俺はこういう状況の為に用意してたんだ！」

肩から提げていたバッグから、俺と同じ体積までに凝縮した小指の先サイズのナノマシンを放り出す。

その数、二百個。今の俺の体重が30キロ程度だから、6000キロ。6tだ。正直な話、用意しすぎたと思う。でも、これって一日で用意出来るのよね。事前に用意してるのは増殖させるのに時間かかるからで。

この三分の一もあれば、俺のやろうとしていた事は成功していたからね。

「よし！メタモルフォーゼッ！」

「古っ！」

「はやては黙つとれ！あと、シグナムは結界頼む！」

重力を完璧に無視した髪型に、鋭い印象を与える要望。

腰には日本刀を差し、服装はボディースーツのような装備。

表面積の多くを保有している箇所は黒く、他の箇所は無骨な骨格。

汗を水分に循環して飲料に転用したり、排泄パックが装備されていたり、温度変化に非常に強かったりと、とても便利な装備。

ばら撒いたナノマシンを物陰で構築。紫色の骨格、スラリとしたシルエットに、背部マウントに装備された突撃砲と74式接近戦用長刀。

また、腕部格納庫には94式近距離戦闘用短刀が装備されており、

近距離戦闘が重視された機体だと分かる。

その二つの剣の材質はスーパーカーボン。詳しくは分からないが、モース硬度15以上の甲殻すらも引き裂く強度。

そこに高周波ブレードの効果を付け加えた、俺にしか作れない最強の戦闘機体だ。長々と書いたが、結局はロボットのことだ。

「た、武御雷！しかも將軍カラー！他には吹雪とラプターかいな！」

『はやて。反応はいい。早く下がれ』

「分かった！死ぬんやないで！」

『フツ、愚問だな。そなたに感謝を』

「無理に原作キャラの口調出さんでもええで」

『黙っておれ』

兎に角、俺は推進剤を吹かして空に飛び立った。

襲い掛かってくる幾本もの枝を切り捨て、突撃砲で牽制を繰り返す。

「オオオオツ！！！」

七本同時に襲い掛かってきた枝を、長刀で切り捨て、120mmで破壊する。

そして、反転噴射、近くのビルに降り立つ。

『決め手にかけるな……呐喊する！』

今思ったんだけど、俺って呐喊ばかりじゃね？

全力噴射、元々高機動用の機体であり、中身が完璧に別物というか、この世に存在するどのロボットよりも高度な俺の設計の為、容易く音速を突破する。

飛来する触手を交わし、時には切り捨て、両腕部で持った長刀を突き立てて全力噴射を続ける。

そして、幾つかの触手をわざと受け、貫かれながらも呐喊を続ける。

『人類を無礼るなッ！人間を……無礼るなああああッ！！！』

中心部に長刀を突き刺した直後、S11モドキを起動。そして、自爆。

俺は普通に脱出していたが、それだけでは面白くないので、ちょっと演出してみることにした。

胴体辺りを切断し、そこから内臓を模した物をぶら下げる。そして、血をどばどば流しながら、重力辺りを無視して綺麗に吹っ飛んだ。

べちゃっ！こんな感じの音を立てて、俺は地面に落ちた。ちなみに場所は、先ほどから桃色の砲撃が打たれていたビルの屋上。

「あ、う……」

「う、おぐえええ……」

なのはは泣き出すわ、何故か人間形態のユーノは吐き出すわ、酷い事になった。

しかし、ここでやめては芸人が廃る、芸人になった覚えは無いが、まだ続けなくてはいけない。

「あ、ああ……伊隅大尉……死にたくない……」

ごぼりと、口から血の塊っぽいものを吐き出し、びくつと左腕を動かす。

「ああ……どうせ死ぬなら……タケルに殺されたかった……」

手を、空に向けて差し出す。

「ごめん……なさい……誰ってわけじゃないけど……ごめん……」

更に大量の血を吐きだし、ユーノの口から溢れるゲロは更に増える。なのはなんか既に気絶してる。耐性があるだけに気絶できないって、辛いなユーノ。

「あ、あ……なんで、今……こんな気持ちなんだろ……みんな、ごめんなさい……」

空へと向けて差し出していた手を、力なく落とす。

「ごめんなさい……姉、上……ごめんなさい……ああ……！消えてしまう……消えてしまう……」

目から光？を失わせ、全身の筋肉を弛緩させる、本当に人間が死んだときに、更に大量の血が溢れるのは、筋肉の締め付けがなくなるかららしい。

「恋が……したかったなあ……タケル……」

そのまま、俺は動かなくなった。ユーノも気絶した。というわけで、次ははやて達の所でやろうと思う。

先ほどから編隊で戦術機を動かしていたので、今の体を治し、他の戦術機へと移る前に二人の記憶を消しておく。

この、記憶消去の魔法だけは教えてもらっていたので、俺が魔法を使えることは分かっていた。

「よし、それじゃ、いくな」

光学迷彩を施し、俺は音もなく飛び立った。戦闘させていた吹雪に乗り移り、呐喊して自爆。

先ほどと同じように、上半身だけではやてたちの所に吹っ飛んでいく。今度は手足のおまけつきだ。

ちなみに、今回の体は白銀だ。

「ゲホッ……かはっ……！」

残しておいた右腕を痙攣させ、でろりと血を吐き出す。

「あ……れ？俺の……腕、と足……どこ、行っただよ……ああ……  
……右腕は……あるな……」

「ああ……ごめん、ごめんなあ……純夏あ……お前のこと、守るって、言った、のに……」

対するシグナムは随分と冷徹な目で見ている。はやては顔色が悪いが、苦笑いを浮かべている。

「せんせえ……ごめん……せつかく、OSまで……用意、してくれたのに……俺……人類の希望になれません……でしたよ……」

ギリギリで繋がっていた状態にしていた右腕を無理やり持ち上げよ



うとして、肘の辺りから千切れさせる。

「あ、ああああ！……俺の、俺の腕……ごめん……ごめん……冥  
夜……委員長……タマ……綾峰……美琴……ごめんよ……俺の腕  
で……守るって、言った、のに……」

口から血の塊を吐き出し、無理やり首だけを起き上がらせる。

「ごめん……ごめん……みんな……ごめんよ……俺……さき、逝  
つちまう……みんな……戦おうって……言った、のに……！」

掠れながらも、口調だけは強く。

「先に、九段で……待ってるからなあ……きっと……BETAなん  
かぶつ殺して……酒でも飲もう……みんな……靖國で待ってるから」  
起こしていた首から力を脱力させる為に、首に筋弛緩剤を投与し、  
後頭部をアスファルトに激突させる。

「きっと……勝つって信じてるから……」

でろー、とそこらに血を垂れ流し、俺は死んだふりをした。ただし、  
心臓も脳波も停止し、体も全く動かないという、完璧な死んだふり。  
もしも医者が診察したら、全員が死亡認定を出す。というか、これ  
が見破れる人間が居るわけが無い。

「刹那。いい加減に起きろ」

「せつちゃん。流石に悪趣味やで。はよ戻り」

「ノリが悪いぞ」

俺はそのまんまで、背中に浮遊機能だけの飛行ユニットを形成する。手の平サイズのユニットなので、向うからは見えない。

「あのさあ、俺が精一杯の演技をして、未来の大魔王を苦勞して気絶させたんだから、少しは褒めてくれるか？」

「そうなたら誰が封印すると思ってるんや？ん？言ってみい」

「はやてだろ。ちょっと考えれば分かるのに、人に聞くなよ、全くはやてはおばかさんだなあ」

ブヂッ！何かキレた。それと同時に、はやての手元に本が現れる。夜天の魔道書だ。

身の危険を感じたので、体を元に戻しておく。

「セットアップ」

騎士甲冑を身に纏い、肉体強化をかけたはやてが立ち上がる。はやて、普段は自分の演算能力だけで肉体強化をかけているので、デバイスを使うと凄いことになる。

そりやあもう、スーパーマンもびっくりな身体能力になる。具体的に言う、硬貨を引き千切ったり。

「まあ、今はひとまずあの木や、人間もおるみたいやし、非殺傷設定やな」

言葉と同時、とんでもない魔力が渦巻き、三の魔力スフィアを形成する。ラグナロクだ。

そう思った次の瞬間には、砲撃開始。木が消し飛んで、俺が制御していたラプターで二人の人間をキャッチする。

ちなみに、ラプターの中身はウォーケンだ。なんとなく好きなんだ。言っておくが、俺はウホツな人じゃないぞ。世間様に顔向けできない性癖だけど、そこまで腐ってない。

「さて、次は刹那やな」

もう一発、ラグナロクをチャージし始めるはやて。「殺傷設定……よほど頭に來たのか」何言ってるんすかシグナムさん。

ああ、俺はこの後、跡形も残さずに消し飛ばされたよ、消し飛ばしたところをシャルとヴィータに見られたのは予想外だった。戻ってきたときには、ヴィータがはやてに泣きついていた。ヴィータ可愛くて、俺死ぬかもしれない。

## 第十三話（前書き）

ギャグ作品なのになんでいきなりシリアスになってるんだ……。

### 第十三話

それから三日後。ふと、シグナムが温泉旅行に行かないかと提案してきた。

なんでも、日本には湯治という習慣があり、温泉に浸かることによって療養するという話を聞いたらしい。

まあ、湯治に効果があることは認める。泉質によっては確かに病状に効果があり、はやての場合は筋力の低下が原因の為、筋肉痛に効果のある温泉でいいはず。

また、温泉に浸かることによって人間はリラックスを覚える。特に、体温よりも数度高いか低い程度の温泉に長時間浸ければ、高いリラックス効果を得れる。

更に、人間は思い込む事によって様々な力を得る。催眠術をかけてプロボクサーだと思わせてしまえば、プロボクサー並みのパンチすらも繰り出す。

日本人という人種に染み付いた温泉という対象に対する暗示効果は高いため、プラセボ効果（または偽薬効果）により、治癒も早まるだが、シグナム。君が風呂好きだというのは周知の事実であり、一番生きたそうにしているのは貴女だという事に気付いていない。

「確か……この時期だと……」

なのは達も温泉旅行に来ている頃じゃなかろうか？まあ、リンカーコアの活動を弱めていれば気付かれないだろう。

あるいは、リンカーコアの出力を上げて、制御せずに垂れ流しにすればいいかもしれない。そうすれば、魔法関係者には思えなくなるだろう。

「まあ、問題は無いか。あとは、はやてに確認しないとな」

「そうか！なら、主はやてに尋ねてくる」

ルンルン気分とは、ああ言う事を言うのか。スキップが一番似合わないだろうと思っていたが、あり得ないほどに似合っていた。

「人は好きな物の為にありとあらゆるものを犠牲にするっていうのは、本当だったか」

「あたし、あんなシグナム初めて見たぞ。ぶっちゃけ別人かと思っちゃまった」

俺もだよ。ちなみに、俺はさっきからずっと、ヴィータを膝の上にかけてテレビを見ている。

また、今の俺はなんとなく大人モード（俺の前世の姿）なので、ヴィータは俺の体に隠れて完璧に見えなくなってる。

さっき、早口に温泉のいいところを捲くし立てているシグナムは、きっと気付いていない。可哀想に。きっと、ヴォルケنزにはばれなくなかったんだろうに。

「ヴィータ。アイゼンは？」

「ん、バッチリ記録してる」

浮かび上がる映像。俺の後頭部のカメラと強引に接続していた為、シグナムがイイ笑顔で捲くし立てているのがよく分かる。

「シグナム以外のデバイスに送信するか？」

「する」

というわけで、二時間後に俺とヴィータがレヴァンティンを起動したシグナムに追っかけまわされるのは必然だった。

三日後……石田先生にギラギラとした目付きで温泉旅行に行く許可を取ったシグナムは、溢れんばかりの笑顔だった。

そりゃあもう、顔を向けたドブ川が清流になりそうなくらいの笑顔。どこの超人だよっていう突っ込みはなしな。

えっと、ほら、あれだよ。とあるページだけを抜き出すと、ジェロニモが投げ飛ばされてるのに、観客席で慌ててるように見えたりするって……何の関係があるんだ？

とにかく、あれはジェロニモの弟であって、ジェロニモ本人じゃないんだよ。そうそう、ジェロニモって言えば、大分昔にあったドラマでそういう役柄があったよね。

なんだったか、ネイティブの人の癖に、何故か日本に住んでて、明らかに日本人顔のインディアン。

そうそう、インディアンといえばサンドマンだよ。あの無茶苦茶な走法。時速40キロ出すって、原付並みじゃねえかよ。

あと、裸足で岩場を走るんじゃない。見てるこっちが痛くなって来るんだよ。

「刹那。現実から逃げるな」

「H A H A H A？一体僕がどういう風に現実から逃げてるって？」

「ヴィータが疲れて眠りにつき、刹那に寄り添って眠り始めてから明らかに挙動不審だ」

「うるせえ犬ッコロ！保健所にぶちこまれてえのか！それとも生物

学科に放り込んで解剖させんぞ!？」

「何故いきなり豹変する!？」

「うつつうつるせえええええ!!! べべ、別に! ヴィータの涎を舐めようとか思ってたないぞ!？」

寒風吹き荒ぶ氷の大地のような風が吹いた。ちなみに、俺達が移動手段に使っているのは、人間形態になったザッフィーが借りてきたレンタカーだ。

書類とかその辺りは魔法で誤魔化した。返すときはこっそり。後で警察のデータベースに侵入して運転免許を偽造しよう。

戸籍も偽造したし。今更そこら辺偽造したっていいよね。っと、現実逃避しても仕方ないか。

はやてとシャマルのやけに生暖かい視線と、ザッフィーの冷たい目。温泉に有頂天になって魔力駄々漏れのシグナム。目を瞑っているリン。

「なんだよ!？ お前等だつて好きになった奴の飲みかけのペットボトルとか欲しいだろ!？ ちなみに俺はそれをこっそり回収して高値で売りさばくブローカーだ」

「なんでもないんや。うん。せつちゃんがやっぱ危ない人って再認識したんと、ヴィータはここまで愛されて幸せもんやなあって思ったんや」

「はっはっは、何を今更。俺がどれくらい危険かって言うと、一級どころか特級ロストログア扱いになるくらいの危険さで。

俺のヴィータへの愛は凄いや? でもね、重いよ。その重さがね、ヴィータを傷つけるんじゃないかって、いっつも不安なんだ」



唐突な暴露。けど、それは本当だ。俺自身、変人で駄目人間だと自覚してる。

俺の愛は妄執的で、あるいはストーカーのように映るかも知れない、だからこそ、俺は怖い。

いつか、俺がヴィータを傷つけてしまうんじゃないかって。誰かを傷つけてしまうんじゃないかって。

たった一人、殺戮の荒野に立ち尽くす破壊神になってしまうんじゃないかって。皮肉にも俺にはそれを成すだけの力がある。

俺の全魔力を解放すれば、それこそ全次元世界を巻き込んだ次元震を引き起こせる。俺の魔力生成量は無限に増やせる。

俺の魔力で魔力を生成する器官を生成し、そこから生まれた魔力でまた器官を生成する。それこそ、地球規模にまで増やせば、把握していない世界すらも滅ぼせる。

そんな事を、してしまうかもしれない。俺はヴィータが好きだ。けれど、ヴィータには笑っていて欲しい。皆で馬鹿やって、家族として暮らして、皆で笑って。

時には涙を流しても、分かち合えるような、そんな関係がいつまでも続いて欲しい。けど、俺は強欲だから、満足できないかも知れない。

いつか、そんな曖昧だけれど、0とはいえない可能性の中。俺は破壊神になってしまうんじゃないかって、いつでも不安だから。

いつつも悩んで、こんな馬鹿みたいな事をしでもない、俺は自分自身を保てなくなってしまう、それで怖いんだ。

「大丈夫や」

「は？」

「そうやって、悩んで、本当にヴィータの為だけに悩めるんや。き

つと、間違った選択なんかせえへん。

それが最善の選択なんかは誰にも分からへん。けど、絶対に間違いなんかじゃないって、私が信じてる」

「あんがと……今みたいな告白って、なんか最終決選みたいなときにするはずなんだけにゃー。」

でも、まあ……大分、楽になった」

「確かにまあ、最初の頃は危ない人で、変な奴やと思っとったけど、ホンマにヴィータが嫌がる事はせえへんかった。

ヴィータが嫌がったら、すぐにやめとったし、いつもヴィータの事を気遣つとるのが分かったんやで？」

「そうですよ。刹那くん。ヴィータちゃんも最初は戸惑ってたけど、今は違うみたいだし。

その、恋人っていう関係になれるかは分かりませんが、ヴィータちゃんが刹那君を嫌いになることは無いと思いますよ」

「うむ。そうだな。時々、私が刹那をしばかなければいけないかと思っただが、杞憂だった。

いつも、ヴィータを第一に考えて行動していることがすぐに分かった」

「なんや、おまいら。そんなに優しくさりおってからに。

わいはあれやで？危ない人なんやで？それこそ、ストーカーみたいなになるかもしれへんのやで？」

振るえそうになる声を、脳内で作り出した薬品で押さえ込み、あふれ出そうになる涙を、涙腺を無理やり詰まらせる事で止めた。

「でも、大丈夫や。さつきも言っただやろ？せつちゃんがそうやって悩める限り、そんな事にはならへんで。

ほら、月姫でも言うと思ったやろ？本物のバケモノっていうのは、優れた理性で人を殺すって。ケモノは荒れ狂う本能で人を殺すって。ただ、殺すために考えて、殺すために生きて、殺すために技を振るって、殺すために殺す。そういうんをバケモノっていうんや。

やったら、ヴィータを追っかけまわす事にそうやって悩むんなら、せつちゃんはそうならへん。信じとるからな」

こんな風に、俺は始めて家族の優しさというのに触れたかもしれない。

眠り続けているヴィータはよしとして、ヘヴン状態のポニテ侍は外にほった捨てるべきだったかも。

そんなこんなで温泉宿に辿り着き、部屋に荷物を運び込むやいなや、シグナムははやてを連れて温泉に行った。

揉まれる事すら、温泉の前では些細な事柄なんだろうな。多分、いやきつと。

## 第十四話

「ザッフィー、お前はいかんのか？」

「私はいい」

「そうか。後で縛り付けて温泉にぶち込んでやるからな」

反論するザッフィーの口に湯飲みを放り込み、半ば命を奪いかねない状態にして黙らせる。

実を言うと、俺は風呂に入る必要が無い。そもそも、生命活動全てが擬態となっっているので、実際は睡眠も飯も食べる必要が無い。

機械だから汗もかかないし、老廃物も出ない。人間としての形はあるので、擬態としての睡眠欲や食欲もある。ちなみに性欲もあるが、今は抑制している。

「なに難しい顔してんだ？」

「いや、なんでもね」

いつの間にやら、俺とザッフィーの部屋に来ていたヴィータが、俺の顔を見て怪訝な顔をする。

「俺も温泉に入るとするかな。なんでも、ここの温泉は美容にいいらしいぞ？」

「？なんでだ？」

「しらねー」

そもそも、アルカリだのなんだのは確かに肌にはいいが、美容にいいとは限らない。

第一に、美容にいいで、具体的に何処がよくなって、どういう風に綺麗になるんか説明して欲しいもんだ。

「んじゃあ、あたしも行ってくる。はやても入ってるだろうし」

「おう。行つて来い」

指をワイヤーに変えて伸ばし、ザフィーラを雁字搦めに縛る。

大柄な男を引きずって風呂に連れて行く子供はさぞ妙に見えたことだろう。

ザフィーラは普段は犬形態なので、服を持っていない。それ故、人間形態の服装はバリアジャケットだ。

なので、脱がせようとしても、本人に脱ぐ意思がなければ絶対に脱げない。

「フツ……」

「何笑ってんだ犬野郎」

バリアジャケットのまま湯船にぶち込んだ。逆転の発想である？  
幸い、他に客が居なかったので抗議の声は無い。

「あー……いい湯だな」

「私は最悪の気分だ」

「こまけえこたあいいんだよ。つか、あれか？風呂嫌いか？犬じゃ

あるまいし」

「私は狼だ！」

「わ！馬鹿！女湯に聞こえるだろうが！」

後頭部を殴打し、ザフィーラを湯船にぶち込む。一応動体センサーで女風呂で何らかのアクションが無いか確かめるが、幸い誰も居ないようだ。

ちなみに、はやてとシグナムとシャルは外の露天風呂に居るようだ。ああ、俺が入ってる温泉は室内の温泉だ。露天風呂には次に入る事にする。

「大丈夫みたいだな。おい、ザッフィー次からはもう少し考えて喋れよ？あれ？ザッフィー？」

仰向けで浮かび上がる守護獣のザフィーラ。酸欠で気絶するとは情けない。一先ず、湯船から出して、肺に水が入ってるか確認。大丈夫みたいだな。

軽く放電して起こしてやると、殴りかかってきた。五秒で振り返ちにした。基本性能が違っただよ。お前等の強化って一時的な出力アップだけど、

俺は内部構造を把握して、骨、筋肉、腱、皮膚、全てを最高レベルまで強化している。具体的なパンチ力は20tくらい。速度は400キロくらいか？人間には見切れないな。

「ザッフィー。最近君、影薄いね」

「……言うな」

「きっと、ヴォルケンス唯一の男だからいけないんだと思うんだ。  
というわけで、ここに夜天の書がある」

「ほう」

「プログラムに侵入して、全員を男にするか、ザフィーラを女にするか、選ぶんだ」

「どちらも断る」

「分かった。ザフィーラの魔力結合密度を下げて、光の透過率を上げて影すらも消すから」

「地味な嫌がらせを……」

「で、どうする？」

「このままでいい」

「そうか」

まあ、こんな感じで男同士の会話を楽しんだ。風呂上りにはコーヒ―牛乳を飲んだ。おいしゅうございました。

風呂から上がったシグナムはやけに肌が綺麗になった。温泉から魔力とか吸収してんじゃないか？

## 第十五話

「ヴィータさんヴィータさん。売店にアイスが売ってましたよ。一緒に買って食べましょう」

「あたしバニラ」

「んじゃあ、俺はチョコにしよう」

というわけで、売店でアイスを買って、近くのソファアに座って食べる。ちべたくておいしでござる。

「ヴィータ。一口いるか？」

「貰う」

ヴィータに一口上げた。デカイ一口だ……半分くらい持ってかれた。

「畜生っ！持ってかれたっ！」

「右手と左足は消さなくていいぞ」

「最近ヴィータにもネタが通じるようになって、嬉しいんだか、悲しいんだか、よく分からんぞ」

今日も楽しくヴィータを餌付けした。

「シャルさんシャルさん……………フッ」



鼻で笑い、馬鹿にしたような目を向ける。

「な、なんなんですかぁ!？」

「いや、別に?さつきヴィータと一緒に売店行った時に、フルーツ牛乳を買ってきたであります。飲むであります。あと、失敗して胸元にこぼすとなおいであります」

「えつと……なんでカメラ構えてるの?」

「普通の牛乳よりも、フルーツ牛乳の方がそれらしいからであります。写真に取って、はやてに見せるであります」

こんな感じでシャルで遊んだ。

「シグナムさんシグナムさん」

「なんだ?」

機嫌がよさそうであります。

「シグナムさんは温泉が好きなのでありますか?」

「ふっ……」

「誤魔化さないで欲しいのであります。証拠としてシグナムさんが読んでいたパンフレット類がここにあるであります」

胸をパカッと開き、そこからパンフレットを取り出す。

「さ、これが証拠であります。アイギスに嘘はつけないであります」

「誰がアイギスだ」

「私であります！」

殴られた。兎に角、認めてくれないのでやめた。

「アインさんアインさん」

「私の事か？」

「うん。リインフォース・アイン。前に防衛プログラムを破壊したときに、欠片が残ったから、それを元に今リインフォース・ツヴァイ作ってんの」

「なるほど……私は聞いていなかったが……」

「そりゃそうだろ。だって、アインに初めて言ったんだし」

「はぁ……つまり、なんだ。私とお前以外は知らないと言う事か」

「そうだよ。んで、質問が一つ。なんでアインさん常に人間形態なの？小さくなれるんじゃないのか？」

「いや、私の場合、そういった拡張性が無い。だから、このように人間形態にしかねない。夜天の書が主を選ぶのはそういった理由だ」

なるほど。人形だと、融合事故とか起こしやすいんだよな。だから、融合適正の高い人間を選ぶわけか。

「んー……となると、やっぱりツヴァイは小人形態になれるように作るべきか。ダブルユニゾンも考えてるし」

「……なんだそれは？」

「ユニゾンした状態で更にユニゾンして、三対のリンカーコアによる共鳴現象を使って、魔力の流動速度や生成量、効率を飛躍的に高めるっていうシステム。」

正直な話、そんなの使えるように作ったら、今の技術だと何百年もかかる。ただダブルでユニゾンするだけでもかなりの力になるんだけどね」

ただ、俺の処理装置は全世界のパソコンを並列に接続してもお釣りが大量に来るくらいに高い。

管理局の処理装置全てを並列に繋がたって無駄無駄。というか、魔力さえあれば無限に処理速度が上がるのだ。

そんなわけで、我が家のパソコンは気持ち悪いほどの処理速度を兼ね備えている。ちなみに概算では4PB程度になっている。

ちなみに、記憶媒体もちよつと弄ってあるので、全世界のサーバー容量をぶち込んでも平気なようにとふざけたので、1EBほどの記憶容量がある。どう使えと？

「そうか……妹の事は楽しみにしておこう」

こんな感じでツヴァイについて相談した。

「はやてさんはやてさん」

「なんや？」

「卓球やらないか？」

というわけで、全員連れて卓球をする事に。

## 第十六話

「第14回、俺のこの手が真つ赤に燃えるう！勝利を掴めと轟き叫ぶつ！卓球大会を開催しまゝす！」

「なんや、そのわけわからん大会名は。奥義が大会名かはつきりせえよ」

「じゃ、奥義で」

「大会名は！？」

「第一回はやて乱痴気騒ぎ」

「なんで私の名前が入ってるか詳しく聞かせてもらおか」

「聞きたいかね？ならば教えてやろう。なんとなくッ！」

殴られた。痛かった。はやての腕力は、今まで車椅子生活だったの  
で並外れて高い。

「よしっ！阿弥陀籤を作ったぞ！全員選べ！」

阿弥陀の結果。

リインフォースVSシグナム  
はやてVSザフィーラ

俺VSヴィータ

シード権がシャマルに回った。

というわけで、第一回戦の様子をお送りします。

「紫電一閃！」

「ブラッディダガー！」

「いちいち叫ぶなっ！」

二人とも、肉体強化をバツチリかけて、目にも留まらぬ速度でピンポン玉が飛び交う。

瞬きをしている間に、三回は往復しているのだから、その速さがお分かりいただけるだろう。

カカカカと、ピンポン玉をラケットで床に連続でぶつけるような音がしているのに、ピンポン玉は宙を舞っている。

ちなみに、ルールを適用すると、開始五秒で後攻が反則負けになる。まあ、それだと勝負が成り立たないので、打ち損ねた場合のみ点数となる。

「はあああっ！！！！」

「やああああ！！！！！」

この二人は放って置こう。だって、十分は経つのに未だに点数が入ってないんだ。

第二回戦。はやてVSザフィーラ。

「ザフィーラ。手加減はなしやよ？」

「分かりました」

はやては飛行魔法で浮かんでいる。旅館は少々時期外れのためか、他に客がおらず、旅館の人間も遊戯室には余り来ない。

その為、魔法を使つてありえない勝負までしているわけだ。

結果はザフィーラの勝ち。まあ、飛行魔法を使っているとはいえ、リーチの差は埋まらないから仕方ない。

第三回戦。俺VSヴィータ。

「よし、勝負だヴィータ」

「汚ねえ！なんだよそれ！？」

「うん？アシユラマンごっこ」

八本に増えた俺の腕。全てにラケットが握られている。

「それ禁止！」

「分かった分かった」

仕方ないので、992本増やして、千手観音にした。

「よし、やるか」

「シュワルベフリーゲン！」

強烈な誘導弾を喰らって、俺は仕方なく二本腕で対戦することとな

った。

ちなみに、強化魔法は使わないという事になっている。何故なら、使うと大変なことになるからだ。

ヴィータは基本的に突破形なので、力の調整が上手くない。強化魔法の腕力で思い切り打てば、ピンポン玉なんて破裂する。

俺もそうで、思い切り打とうとすれば、風圧でラケットが壊れる。なので、必然的に魔法無しの勝負となった。

「多連拳！」

腕からなんとなくもう一本腕を生やして打つ。意味は無い。

「テートリヒシュラーク！」

叫ぶだけで、人間の力は増える。戦場での雄叫びは、相手を威圧するのと、自分の全力を出す効果がある。

叫び声を出すことによって、ほんの僅かな時間だが、筋肉の抑制を外す、つまりは無意識のリミッターを解除出来るのだ。

その為、攻撃をする時に叫び声を出すのは案外効果がある。ただ、技の名前を叫ぶの馬鹿でしかない。自分の攻撃法を宣言してどうするのだ。

「多連脚！」

足を一本増やして打つ。意味なんぞ全く無い。

「ギガントシュラーク！」

さっきよりも強い打撃が帰って来る。



「螺旋丸！」

左手に魔力スフィアを形成して打ち返す。意味なんぞ無い。

「てやあああああ！！！」

「まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す！」

A M Fを展開して打ち返す。意味なんて一切無い。

「やああああ！！！」

「投影開始！」

俺の後ろに夫婦剣もどきを作り出して打ち返す。意味なんて無い。

「はああああ！！！」

「プラクテ・ビギ・ナル！アールデスカット！」

頭の上に火が灯る。意味なんて無い。

「シュワルベフリーゲン！」

「約束された勝利の剣！」

俺の足元にエクスカリバーを作り出し、打ち返す。意味なんて無いけど、一点先取。

こんな感じで、訳の分からない卓球勝負は続いた。結果は俺の負けとだけ言っておこう。

「……まだかね」

「終わらへんなあ」

「二人とも真剣ですねー」

「あたし、ジュース買って来る」

未だに続く、二人の勝負。しかし、シグナムが8点、リインフォー  
スが5点と、温泉パワーを吸収したシグナムが先行していた。  
ちなみに、ここまで来るのに一時間近くたっている。

「しかし、これは男にとって目に毒ですよ？」

「そやなあ、二人とも浴衣ははだけとるし、ブラはしとるけど、ブ  
ルンブルン揺れとるもんなあ」

「まあ、俺には関係ありませんがね」

空間投射モニターで、俺はエヴァンゲリオンを放送している。俺の  
脳味噌は理論上無限の記憶容量があるので、幾らでも高画質の動画  
が取り込めるのだ。

え？著作権？コピー？これはテレビで放送してたのをカメラで撮影  
しただけだよ？え？詭弁？詭弁悪いか？

「はやて、はやて。俺に向かってパンチするんだ」

はやての拳が赤いフィールドに弾かれる。

「なんでや？」

「殴ってから聞くな。見ての通り、A Tフィールドの真似事だ。魔法だけだな」

ちなみに、俺の魔力光は銀色。とはいっても、魔力光は少し手間をかければ変えられる。

そして、俺の場合は波状にフィールドを展開し、空白部分には無色の魔力光でフィールドを展開している、二重フィールドだ。

ちなみに、強度は結構自身がある。はやてのラグナロクにも耐えられるはずだ。

「じゃあ、次はデイスティオンフィールド」

「はやてはバラバラになりたいのか？」

「お断りします」

「そうか」

デイスティオンフィールドは周囲の空間を歪ませる為、巻き込まれるとバラバラになる。

「んじゃあ、ラザフォードフィールド」

「んー、はい」

手に持っていた空き缶が、重力偏重によってぐしゃぐしゃになる。考えるのも馬鹿馬鹿しいほどの高圧力によって、スチール製の缶が融ける。

中心に球形となつて保持された金属を、重力操作によつて形を変えていく。計測する為のレーザーを照射して形を整えていく。

形を整え終えたら、分子運動を停止させることによつて一気に絶対零度にまで冷やす。凝固した後分子運動を起こし、人間の肌と同じくらいの温度に変える。

「完成した…… 121/1、ヴィータファイギアだ」

「精密すぎて逆に怖いで」

ちなみに、重力を発生させたシステムは俺の体内に存在している。大分前に作つておいたのだが、俺の攻撃まで偏向してしまうので使いどころが難しい。

所謂、究極防御なのだが、俺の攻撃まで正確に命中しなくなつてしまつては意味が無い。まあ、攻撃する際にその箇所だけを解除すればいいのだが。

「そつえば、荷電粒子砲も撃てるん？」

「撃てるが…… 跡形もなく消し飛んじまうから、使えない」

管理局の人間が非殺傷設定を使うのが当たり前のように、俺は人間を容易く殺傷できるような武器は使わない。

というか、使うと平穩がなくなつてしまうので、使えないというのが正しい。まあ、非殺傷設定なら幾らでも使うわけですが。

「つと、そうこついつてるうちに、決着がついたみたいだな」

結果はシグナムの勝ち。温泉パワーテラスゴス。まあ、騎士と魔法使いじゃあ勝負は見えてただけだね、善戦したリインの方がすご

いわけで。

「じゃあ、二回戦開始。シグナムVSザッフィー。ヴィータは待機」

というか、六人でトーナメント形式したのが間違いな訳ですよ。

あと、四位決定戦をやった。結果はラインの圧勝。だって、シグナムに追隨してた化け物に勝てるわけが無い。

まあ、結果としてというか、当然というか、シグナムの優勝。

「おめでとう！優勝商品は、タワシ五十年分です！」

一年に三個という計算に基づき、150個のタワシ。何に使えと？

「どうすれば……」

「二位の優勝商品は鉛三万円分です！」

五キロのインゴットに成型した鉛の塊をザフィーラに進呈。

「……何に使えば……」

「オーディオにでも使え。三位の優勝商品はノリで作ったアルトアイゼンの武装、リボルビングステーキです」

ちなみに、これはデバイスである。

「セットアップしてもいいか？」

「いいぞ。ヴィータ用に設定してあるしな」

ちなみに、このリボルビングステークもアームドデバイス。ていうか、あんな馬鹿げた武器はストレージやインテリジェントには出来ない。ぶっ壊れる。

グイータがセットアップし、肘辺りまである馬鹿げた大きさのパイルバンカーとなる。

「お、重ッ！」

「浮遊術式組み込みであるから、使うときはそれも一緒に発動する。六発カートリッジが組み込まれてて、全部俺が作ったカートリッジ」

そして、それに耐え切れるように素材も俺の一部。いつでも一緒だよ。うわ、くせえ。さぶいぼがヤバイ。

なお、カートリッジをロードしてそのまま爆破するのが正しい使い方であり、収束なんてしてはいけない。レーザーが出るもん。

「あんがとな！」

「フハハハ、いいって事よ！」

はやてが大爆笑して転げまわっている。うるせえ。

「こ、こら！なんで三位の商品が一番豪華なんだ！」

シグナムさんに文句言われた。

仕方ないので、シグナムさんが騎士甲冑を着て、無骨な大剣を構えているカードを渡す。デバイスの待機状態をこうするのは大変だった。

「仕方ないな……はい、エンシス・エクソルキザンス。またの名を

ハマノツルギ。起動パスワードはアデアット」

「アデアット……随分と無骨な大剣だな」

はやてが腹を抱えて床を殴りつけている。黙ってる。

「その剣にはAMFを組み込んであって、Bランク程度の魔法なら問答無用で消し飛ばす。AAAランク程度の砲撃なら、減衰してBランク程度まで威力を落とせるぞ。

ちなみに、その剣自体は刃を落としてあるから、普通の鈍器にしかならんぞ。ちなみに、峰の方が致命傷になるからあしからず」

最近峰打ちというのに憧れているシグナムさん。しかし、模擬戦なんかでやっては意味がない。そして、非殺傷の魔法よりも、鈍器のデバイスの方が痛い。というか死に至る。

「感謝する」

「ザッフィーにはこれ。パスは、絶対だいじょうぶだよが無敵の呪文。だ」

はやてが腹を押さえて痙攣する。死ぬなよ。

「いらん」

「ごめん、流石にさっきの嘘。ヴィータかはやてならまだ見たいけど、ザッフィーがやったら拷問だわ。本当は、まずはそのふざけた幻想をぶち殺す。だ」

「まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！」

はやてがピクリとも動かなくなる。

「あ、あかん……お腹からブチッて音が……」

「メディック！メディイック！」

ひとまずシャルマルに治療させて、ザフィーラのデバイスの説明。

「そのデバイスも基本的な所はさっきのシグナムに渡したのと同じ。名前は幻想殺し（イマジンブレイカー）」

前にザッフィーが使ってた簞手に付随してセットアップされるから、前のデバイスと併用しろよ」

「どんな使い方を？」

「うん？シグナムとの違いは単純明快だ。シグナムは周囲にAMFを展開してるけど、そのデバイスのAMF範囲はメツチャ狭い。両手首から先。手だけ。」

ただし、減衰率は異常。Sランク砲撃も受け止めて消し飛ばせる」  
まさしくイマジンブレイカー。はやては腹を押さえて涙を流している。

「シャルマルにはこれ。パスは、エルルウ」

「エルルウ……ですか？」

シャルマルの側頭部に虎耳が現れる。これぞシャルマルウ。



「そのデバイスは、料理を作るときに内部のレシピと食い違う物を入れようとした時に電撃を食らわせて阻止する。

そして、最低でも食えるレベルに料理を昇華させる事が可能になるが……どこまで行けるか」

シャマルに怒られた。いや、シャマルウに怒られた。はやては切れた腹筋を酷使してまで笑い続けている。

「で、シャマルウのデバイスはそれ以外にも掃除洗濯といった、家事全般を補助する効果がある。頑張れよ」

そんなこんなで、卓球大会は終了した。

## 第十七話

卓球大会が終わり、風呂に入って湯冷ましという事で、みんな散歩に出た。

「お、結構大きい泉があるぞ」

「ここが大聖杯の具現する場所……なんて醜い肉の塊なんや……」

「ないから。ワカメが肉になったとかないから」

「ところで、私の声って遠坂に似てるとおもわへん？」

「そりや似てるだゲフンゲフン。確かにそっくりだな」

声優が同じだから、と言い掛けて危うくストップした。危ない所だったな。

「で、前に宝石魔術が使えないかやってみたんや」

「ほう」

「天然物の屑ルビーを買って、血をたらしてみたんやけど、なんも起こらんかったわ」

「そらそつだな」

「んで、前に物に魔力を込めるって言う方法を教えてもらうと、血に魔力を込めて垂らしてみたんやけど、宝石が光った」

「そりやすげえな!？」

本当に宝石魔術使えたのかよ!？

「それは違う。単純に宝石に垂らした血から霧散した魔力光で光って見えただけだ」

「夢がないな、リインフォース」

「だが、内部に血液を浸透させて魔力を内部で流動させれば擬似的なリンカーコアとして内部に魔力を集積させるのは可能だ」

「夢が一杯だな、リインフォース」

どっちがどっちか分からなくなってきた。

「じゃあ、ザファイラには投影を使えるようになってもらわないと」

「いや、ここは千の顔を持つ英雄かもしれへんで」

「ザッファイはあんな変態じゃないし、剣もちゃんと刺さるから」

「そつえばそうやな」

剣が刺さらないとかどんなバグキャラ？

「バグキャラはせつちゃん一人で十分や」

「俺はバグキャラじゃ……なぜ皆で頷く？」

うんうん、といった調子で首を上下に振っている皆さん。

「魔力量は魔力炉並み、というよりも、個人で計れないから魔力炉並みといってるだけで、魔力炉よりも遥かに出力があるかもしれない」

実を言うと一人で次元世界を破壊出来ます。

「その上処理速度も艦載処理装置以上。1万個の魔力スフィア展開した時は悪い夢かとおもった」

実はアレでも余裕です。使えば億単位のスフィアも形成できます。

「木っ端微塵になったとおもったら次の瞬間には後ろに現れた時は夢に出ました」

単純に再構築しただけです。

「全力の攻撃をハエでもはらうかのように弾かれた時は死のうかと思った。当たれば即死するような攻撃だったのに……」

即死とは即座に死ぬことである。

「というわけで、せっちゃんはバグキャラやな。正直な話、私の魔力よりもずっと多いから、私弱いと思ってたんやで？」

「またまたご冗談を。魔力値だけでSランク相当のはやてさんが弱いとは」

「その何千倍の魔力を持つお前が居る所為だと言う事を忘れては  
いかん」

そうだったね！

まあ、こんな感じで、八神家はいつも平和です。

## 第十八話

湯治と銘打った温泉旅行三日目。湯治というのは何度も風呂に入ることなので、最低一週間は宿泊する。

ちなみに、今回の予定は二週間。俺は学校行つてないし、はやては学校に行けないし、主治医からも許可を貰っている。

そして、今日は戦闘民族高町家と世界に名だたる大金持ち、バニングス家のお嬢さんと月村家のお嬢さんまでやってくる。

「それってどんなオールスター？」

「確かに……とんでもない顔ぶれだ」

「所で、うちの総資産ってどうなってんだ？」

「え？バニングス家の4倍の資産がありますが？」

税金が恐ろしい事になってますが何か？長者番付の上位ですが？

「うちってすげえ金持ちだったんだ……」

「というか、ヴィータの個人所有の財産でもバニングス家に匹敵してますけど？」

恐るべし我が家庭。まあ、そんな事はどうでもいいんだけど。

遊戯室に置いてあった、ブロック崩しを全ステージクリアして、自販機でコーヒーを購入。不味い。

ぼんやりしていると、何故か戦闘民族ご一行が遊戯室に入ってくる。

「おひさしぶり」

俺の姿を見つけ、こちらに手を振り返すすずかちゃんとアリサ。

「え？せつちゃん知り合いなん？」

「前に誘拐されそうになってたときに、助けてあげたんだよ」

説明していると、すずかが成長したような美人さん、忍さんがいらつしやった。

「私の妹を助けてくれてありがとう」

「別に気にしなくていいですよ。実行犯にはバッチリごうもゲフンゲフン、お灸を据えといたんで」

「あら、それは助かったわ」

笑顔がこわすぐる。

月村さんと笑顔で物騒な会話を終えて、飲み終えた缶コーヒをゴミ箱に放り込む。

「サイヤ人の視線が少々怖いので、俺は退散させて貰いますよ」

恭也さん、忍さんとなたりしないので、俺を睨まないで下さい。

「どうして恭也が戦闘民族だって知ってたのかしら……」

「おい、忍。それは褒めてるのか？貶してるのか？それとサイヤ人とはなんだ？」

バカッパルの会話は無視しといた。

夜。フェイトとなのはが衝突しているらしい魔力の余波を感じたので、現場に急行してみた。

「嘘っ！？Sランク並みの魔導師！？」

え？これでも結構魔力抑えてるんだけど？

先手必勝。そう言う事かは分からないけど、フェイトがなのはとの勝負をほっぽり出してこちらに攻撃を仕掛けてきた。

空中にフェイトの魔力光である金色の魔力スフィアが形成されていきその総数は30を超える。その全てが連射型の大型光球。

合計38個のフォトンスフィアから毎秒7発の斉射を4秒継続し、総数1064発のフォトンランサーで敵を撃ち貫く

対する俺も、同種の魔法の打ち合いをするべく空中にフォトンスフィアを形成していく。

その総数は一万を超える。その全てが連射方の大型光球。一万のフォトンスフィアから毎秒12発の斉射を4秒継続し、総数48000発のフォトンランサーが敵をミンチにする。

「うそ……」

呆然とした様子でフェイトが呟く。

「フォトンランサー、ジェノサイドシフト！」



フェイトを気絶させて、なのはとユーノ所に近づく。

「率直に聞くけど、なんでこんな所で魔法合戦してんの？」

「えっと……その」

何故もじもじする？

「おい、そのフェレットモドキ」

「ユーノです」

「ああ、もしかしてスクライアの？」

「そうですね……知ってるんですか？」

「まあね。ジュエルシードの発掘者で……となると、もしかしてこの世界にジュエルシードが散らばった訳か」

「あ、はい！そうなんです！」

「管理局は？」

「えと……通信できるだけの魔力が戻ってなくて……」

「仕方ないなあ、どうせこの辺りに次元航艦が飛んでるだろうし、今呼び寄せてやるよ」

というわけで、全身のナノマシンを全力稼働開始。次元に干渉するよう大量に魔力を放出していき空間が歪み始める。

「しゅごいまりよくだ……」

ユーノ、お前なんか言葉がへんだぞ？

空間が大きく揺らぎ、次元震が起こり始める。

「う、嘘でしょ！？個人で次元震を起こすなんて！？」

「少し黙ってなさいな」

更に魔力をブーストしていき、次元震の規模をどんどん大きくしていく。

そして、俺の体を維持するのに最低限必要な分だけの魔力を残すと、既に次元震は大規模次元震になっており、もし次元断層を引き起こせば、世界は百個単位で滅ぶだろう。

ちなみに、俺の体にある分だけで引き起こしているため、集積している物を使えば恐ろしい事になるのは当然である。

「何をするつもりですか？」

「え？次元震起こせばこっちに気付くだろうと思って」

「そんな事のためだけに次元震起こしたんですか！？それも超大規模の！こんなのジュエルシードつかっても出来ませんよ！？」

「え？そんな事だけっていうからには……次元断層起こせばいいのか？」

「駄目です！そんなことしたら僕達まで死にますよ！？」

「え？この世界だけ次元断層の範囲から外せるけど？」

「なにその馬鹿みたいな処理能力！？管理局の総力を挙げても出来ませんよ！？」

現実が信じられなくなってきたという、謎の諦めを覚えたユーノ。そして常識はずれな処理能力を発揮する刹那。人間で言えば、細胞一つが店売りパソコン並みの処理能力。

そして、細胞一つが1〜100ミクロンであり、1000ナノメートルで1ミクロン。ナノマシンの定義は10〜100ナノメートル程度

恐ろしい事に俺の体を構成するナノマシンは一つ1ナノメートルであり、細胞一つに数千個以上のナノマシンを込められる。

人間の細胞総数が60兆である為、俺の体を構成するナノマシン総量は京を超えている。最終的な処理能力は計測不能。

更に言うと、俺は数時間で、グレイ・グーという地球をナノマシンの塊が覆うという現象を引き起こすことが可能だ。

一体何を原料にナノマシンを複製しているのか非常に怖い、少なくとも周囲の物質は減少していないし、珪素が減少しているようにも思えない。

魔力は万物の根源という理論で納得しておいた。というか納得しないと怖い。主に質量保存の法則的に。

「あれ？そういえば、さっきの金髪レオタードは？」

「あ、そういえば……」

何時の間にか消えていたフェイト。魔力センサーのログを確認すると、チョット前に転移していた。迂闊だったな。

殆どの演算能力を次元震の操作に宛て過ぎた。むう、その内、遠隔

操作で演算できるように……なんだかマッドな思考が最近増えてきた気がする。

「まあ……いつか。んで、ジュエルシードに関してはこっちもいくつか回収してるし、それはその内渡す。

次元航艦船が到着したら、適当に状況説明しといてやれ。あと、俺が次元震起こしたのはヒミツの方向で」

まあ、個人のリンカーコア出力で超大規模次元震起こしたなんて信じてくれないだろうけど。

「それと……それは、レイジングハートか？」

『Yes』

返事が帰って来る。インテリジェントデバイスって、ちゃんとした人格があるんだよなあ。

「そうか。随分と懐かしいもんに会ったよ」

リリなのと、リリカルおもちゃ箱のレイジングハートって、形状違うんだよな、待機状態は同じみたいだけど。

「Do you know my thing?」（私の事を知っているのですか？）

「まあ……一応」

主に原作で。

「レイジングハートの事、知ってるんですか？」

「んー……知ってるといえば知ってるんだけど……俺の知ってるレイジングハートとは違うみたいだな……役立たず妖精こと、リンデイも居ないし……」

「妖精？リンデイ？」

「あー……緑色の髪してて、30センチくらいの大きさで、重要な時に限って気絶してたりと役に立たない」

「そ、そうなんですか……」

「まあ、あの阿呆が居たら、必然的にアイツも居るんだろうけど、生憎とこっちは違うみたいだし」

リリなのxとら八世界かとも危惧したけど、普通に士郎さんも居たし。

「それじゃ」

飛行ユニットを形成する魔力も残っていないので、俺は歩き出す。

「待って！」

「だが断る！」

元々介入する気はなかったのよ。魔力を押さえてても気付かれちゃった所為で。次からは全力でリンカーコア停止させないとなあ。

仕方ないので、温存しておいた集積ナノマシンを解放。VOBモード

キで一気に戦域を離脱した。

## 第十九話（前書き）

ひとまずサルベージできたのはここまで。後日もう少し探してみます。

## 第十九話

「という訳で、勘弁してください」

日本の心、D O G E Z A をやっているのだが、赦してくれる気配はない。

「駄目だ。勝手に出て行つた挙句、あんな無茶苦茶な次元震を起こしたのだからな」

面白そうな表情で怒っているシグナムとシャマル。ヴィータは寝ているし、ザフィーラは逃げた。リインフォースは不干涉と。

最後の頼みの綱であるはやてへと視線を向けるが、いたずらっ子の様な顔で笑うと。

「ほな、わたしも一緒に入るか」

「神は死んだーっ！」

時刻は2時過ぎ。先ほどのバカみたいな魔力反応で全員が目覚めてしまった上に、最近は大して疲れるような事もしていないので、全員が普通におきてしまった。

ヴィータは俺と遊びまくっているので疲れているようで眠ってしまったが。

「お、俺は混浴なんて絶対に嫌だ！」

「シャマル。頼む」



バインドで拘束され、チェーンバインドでずりずりと引き摺られて行く。ドナドナがBGMとして流れ始める。

先ほど、魔力を大量に解放した所為で体をバラして維持する事も出来ず、力でははやてにすら適わない。

こつなつたら、最後の手段！体を変形させる！

「フハハハア！これで混浴は阻止したぞお！」

「何したん？」

「女になった！これで混浴は阻止……したけど意味ねえなあ……」

「せつちゃんって、案外阿呆やろ？」

それどころか女湯に放り込まれた。鬱だ、死のう。

「ランラン」

「るうー」

可愛いから逆に腹立つ。

「せつちゃんの髪って綺麗やなあ……」

「自動で最善の状態になるんですー……」

消え去ったマイサンと、事前に登録されていた、俺が女だったなら、という身体データ。あれなんなんだ？

しかも、思考まで何らかの薬物誘導をされているのか、ちっとも恥ずかしいと思わない。

「ありゃ？せつちゃん、髪の毛銀色になつとるで？」

「本当ですか！？ああ、本当だっ！」

何故か男のときの口調まで使えない有様。

「うう、厨二病じゃないんですよー……」

「ええやん、綺麗なんやし」

魔力を解放しすぎたかー、帰ったらすぐ寝るつもりだったから、アレだけの消費でも問題ないと思ってたんだけどなあ。

「うう……シグナムの乳房太股を見ても、ちつとも触りたいと思わない……悔しいと思うのはきつと気の迷いなんだよ……」

がつつんがつつんと壁に打ち付けるも、痛いだけで迷いは消えない。

「シャルは何故かシャルウやってるし……」

「いいじゃないですか」

別にいいけどさあ、お前等恥ずかしくねーの？

俺、今は女だけど、一応は男なのよ？

「それで、その少女達はどつたのだ？」

「フェイト・テストロッサ。金髪で、黒いバリアジャケット、ベルカという騎士甲冑の事な。ミッド式の数度重視タイプで、近距離も

遠距離もこなす。

高町なのは。旅館に宿泊中で、白いバリアジャケット。ミッド式の砲撃魔導師。硬い防御と強力な砲撃を使うけど、近距離に持ち込まれたら弱いな。

それに、使ってるデバイスがインテリジェントだから、近距離の打ち合いになったら、武器の差と経験で皆が勝つだろうな。

フェイトはあくまでも近距離でも戦えるってだけ。相手がミッド式なら善戦するだろうけど、近距離に重きを置いているベルカの使い手なら負けるだろ」

「ふつ、当たり前だ。ベルカの騎士が一对一で負けるわけがない」

「なんや？シグナム随分楽しそうっちゅーか、物騒な笑いをうかべとるけど」

「ああ、三度の飯よりバトルが大好きなバトルジャンキーなただけだ。対処法は戦わせるだけだ」

「シャルウは随分と微笑ましそうにしとるけど？」

「頭に蛆が沸いてるだけだ」

「ひ、ひどっ!？」

こんな感じで、八神家はいつも平和です。

翌日。高町家は未だに滞在していて、俺は男に戻れない状態が続い

ている。

昨日、全力で魔力を消費した挙句、残っていたカスみたいな魔力も女になるのに殆ど使った。

その為、データ保持の為にプロテクトを無意識に掛けていたらしく、プロテクトを解除するのに手間取っているのだ。こんな機能設定しなきゃよかった。

というか、俺自体からデータを盗もうとする奴も居ないし、盗むデータもない、そもそも、全次元世界を探しても俺のファイアウォールを突破できる人間は居ない。

「ううー……………」

「どないしたん？」

「後三十分……………」

全処理能力を解除に回してこれなのだから、どれだけ強固なプロテクトがお分かりだろう。

地球の処理装置で処理したら、全P/Cを直結しても年単位の時間が必要となる。アボガドかバナナかと。

「別に女の子のままでええんとちゃう？」

「いやっ！」

「なんやー、かわええのに」

「そんなの別にいいの！私は男の子だもん！」

「…………その口調で？」

「うるさいうるさいうるさい！私男の子なんだもん！」

処理能力を全てプロテクト解除に回しているため、歳相応の思考能力しかないため、このような子供になっていたりする。

「あははー、なんやえろう微笑ましいなあ、妹が居たらこんな感じやろか？」

「違うもん！私男の子だもん！弟だもん！」

「あー、はいはい。弟な」

視界の隅では鼻血の海に沈んだシャマルが映っていた。『はんにんは萌え』謎のダイニングメッセージが残った。

## 第二十話（前書き）

頭の中に残ってたのをパパッと書いたものですので、出来は……。  
ついでに言つと三人称の練習もしてみたり。  
話数を間違えてたので修正。ウボァー！。

## 第二十話

「主はやて。私は温泉に入ってこようと思うのですが。いや、それよりも腹が減った、飯が先だ」

「はへ？晩御飯まではちつと時間あるよ？」

「は？いえ、そうではなく……夕食前に汗を流してこようと思いついて。いや、それよりも腹が減った、飯が先だ」

「シグナムが何を言いたいんか、私にはさっぱり分からへんよ……」

そういつた所で、シャマルが現れる。どうでもいいが、シャマルとすっかりはちべえの関連性が日夜議論されているらしい。

「はやてちゃん。何でもこの旅館、自分でご飯が作れるらしいんです。それで、刹那くんに貰ったデバイスの性能を確認してみたいので、何か作ってみてもいいですか？それで、出来具合を見て欲しいんですけど……君には難しすぎるかな？」

「えーっと、なんや、シャマル。それは私に喧嘩を売ってると考えてええんかな？」

「え、ええ！？そんなつもりはありませんよ！？本当です！信じてください！君には難し過ぎるかな？」

「あ、やつぱ喧嘩売つとるんやな？そうなんやな？」

「違います！違いますよお！本当なんです！シグナムなら分かって





そう言って溜めたところで、全員の羨望と尊敬の視線が突き刺さる。ついでに言つと嫉妬の視線も。

言葉がおかしくなっている面々に後々に袋叩きに会うことは間違いないだろう。

「伊達ではないぞ！そして、女王様とお呼び！」

部屋の空気が凍った。まじめな顔で宣言した言葉は女王様宣言。しかも宣言したのは、灰髪に褐色肌の筋肉質な男性だ。それなんてグロゲ？

「……………ザフィーラ、済まんが近寄ってくれるな。私は変態の同類とは呼ばれたくないのだ。私は誇り高い騎士でありたい。いや、それよりも腹が減った、飯が先だ」

「えっと……………私はザフィーラがどんな趣味を持っても軽蔑はしませんよ？趣味は人それぞれだと思いますし……………でも、近づかないでください。君には難し過ぎるかな？」

カオスである。全員は目で一致団結した。すなわち

刹那をぶっ飛ばすと。

旅館のしょっぱいゲームセンターで遊んでたら、何故かヴィータを

除いた全員が俺に詰め寄ってきた。

いや、何で詰め寄ってきたかの理由は分かっているんだけどね？

「さあ、刹那。即刻いじった箇所を直せ。いや、それよりも腹が減った、飯が先だ」

「腹が減ったんなら売店で何か買ってきたら？」

「違う！私は腹など減っていない！今重要なのは、この言葉を直すところだ！さあ！直せ！今すぐ直せ！いや、それよりも腹が減った、飯が先だ！」

「シグナムが言うとおかしいですから少し黙っててください！さあ、刹那くん。速くこれを直してください。君には難しすぎるかな？」

「少なくとも常人には超難度だろ」

「そういうことを言ってるんじゃないんです！語尾は無視してください！いいですね！？君には難しすぎるかな？」

「うわ……むかつく……」

「聞・い・て・く・だ・さ・い・ね？君には難しすぎるかな？」

「はい」

「こんな語尾で日常生活なんて出来ないでしょう？温泉から帰ってきてご近所さんと話した時に、どこに行ったんですか？って聞かれて、返事した時に、『海鳴温泉ですよ。知ってます？あっちの方にあるんですけど……君には難しすぎるかな？』明らかに喧嘩を売っ

てるじゃないですか！それくらい分かりますよね！？君には難し過ぎるかな？」

「いやいやいや……意味が分からない」

「つまるところ、さつさと直せばいい。私のプロテクトにはじかれたと思ったのもダミーだったのだな？盾の守護獣の面目が丸つぶれだ……そして女王様とお呼び！」

「いやいやいやいや……更に意味が分からない。盾の守護獣と呼ばれたいの？それとも女王様と呼ばれたいの？」

「蒼き狼は盾の守護獣と呼ばれたいのだろう。それと便座カバー」

「蒼き狼、盾の守護獣、便座カバーザファイラ。イミフ」

「いいから直せ！直さねばレヴァンティンの錆びにするぞ！いや、それよりも腹が減った、飯が先だ」

「そうです！直してください！君には難し過ぎるかな？」

「直せ！私は変態認定されたくはない！盾の守護獣でありたいのだ！そして、女王様とお呼び！」

「刹那、修正パッチの作成時間が200時間を越えるようだ。修正パッチを造るのに時間がかかりすぎる。直してくれ。それと便座カバー」

カオス。一言で言い表せるが、このイミフ団体はなんなんだ。そう思っていたところに、売店のビニール袋を持ったヴィータがや

つて来た。

「なにしてんだ？」

「丁度いいところに来たな、ヴィータ。刹那に言ってやれ、私たちの言語を直せとな！いや、それよりも腹が減った、飯が先だ」

「晩飯まであと3時間はあるぞ」

「ヴィータちゃん、語尾は刹那くんの悪戯なんです。だから、語尾は無視してください。君には難し過ぎるかな？」

「喧嘩売ってんのか？」

「それは違う。紅の鉄騎、ひとまず刹那を諭してくれ。言語の修正パッチを作れと。それと便座力バー」

「便座力バーいるのか？」

「いりません！常識で考えてください！君には難し過ぎるかな？」

「やつぱ喧嘩売ってるだろ！？」

シヤマル、なぜお前は自ら泥沼に飛び込む。

「せつちやーん？」

「はいお」

「直さな晩御飯抜きや」

土下座した。

「それではー、せっちゃんを埋めたいと思いまーす」

「な、なにをするきさまらーっ!」

「貴様に対する罰だ。おとなしく受ける」

「直したらしないって言っただろうが!」

「うるさい黙れ。主はやて。刹那はどうしましょう。私としては山中深くに埋めたいのですが」

「土壤汚染問題があるしなあ……」

「海に流すのはどうでしょう?」

「海洋汚染問題がなあ……」

「でしたら、燃やすのは?」

「有害物質とか出るやろ?」

お前らの中で俺はどういう存在になってんだ。ヴィータが止めようとしてくれるのが唯一の救いだ。

「あ、せや。夜天の書で収集するいうんはどうや？」

「夜天の書が闇の書になりかねません」

ちよつと待てやコラ。俺はバグの塊かい。

「仕方ない。埋めよか」

「ハッ！？ヴィータを除く全員が俺をフルボッコにする状況……！  
何者かのスタンド攻撃を受けている可能性がある！」

「スタープラチナ、THE WORLD、ゴールド・エクスペリエンス・レクイエム、クレイジー・ダイヤモンド、ストーンフリーの五つのスタンドからの攻撃ですね、分かります」

「なんとという肉弾戦。しかもオーバークイル。一瞬でミンチですね、分かります」

「怪我はクレイジー・ダイヤモンドで治ります。欠損はゴールド・エクスペリエンス・レクイエムで直します」

「なんと言う超絶拷問。一思いにサククリとやってくれ。はやて愛用の包丁でさ」

「突く、斬る、刻む、叩く、潰すの五つが一つで出来る万能宝具で一思いにやられたいと」

「軍神五兵乙」

というか、斬ると刻むと同じじゃね？叩くと潰すも。

「さーて、それじゃ埋めよか」

「やめろー！シヨツカー！ぶうつとばあすぞぉー！」

「誰がシヨツカーやねんな」

俺は埋められた。スイーツ（笑）。

「アイルビーバック」

「何で床から出てくるんや。バインドはどないした。ロープもどないした」

「どつちもぶつ壊してやったぜ。あと、地面を掘り進んできました」

「サンダーバード乙」

そのチョイスの発想はなかった。と言うかジェット・モグラとかいまどきの子供しらねえよ

「再放送見てたんよ」

「さいですか」

畳から顔だけ出す。顔の周囲はナノマシンでなんとかしてる。

ナノマシンならなんとかしてくれるってばっちゃんが言った。

「ディグダや、ディグダ」

「そろそろディグダの全体図考えようぜ」

「首から下は筋骨隆々のオッサン説」

「ダグトリオになると頭が増えるから、アシユラマン説」

「結局筋骨隆々やな」

「けど居合い切りなんかが使えなかったっけ？あかし、確かディグダに覚えさせたぞ」

「ヴィータの言うとおりやな。確かに引つかくとかも覚えるんやし、爪とかあるんちゃう？」

「キキキキキって笑ったら一発なんだが」

「あれは毛生えてるやろ。毒もってるし」

「毒の爪のジャンガ様デイスってんのかテメエ」

「何で怒るんや」

「なんとなく」

と言っわけで、相変わらず雑談で終わる日でした。まる。



## 第二十話（後書き）

超ぐだぐだ。途中から一人称に戻ってるし

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9620r/>

---

やっぱり男の娘の話。リリカルなのはオリ主

2011年4月30日18時18分発行